
青春謳華

桂木 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春謳華

【Nコード】

N1465D

【作者名】

桂木 景

【あらすじ】

冴えない男、陽介。彼を巡る女性達。モテないはずの彼が西城に告白したことによっていきなりモテ始め…。軽音楽を中心に描いて参ります。

告白

「俺は西城のことが好きだ!!」

校舎裏で俺は中学一番美女、西城さいじょう 明日香あすかに告白した。

「まあ、予想はしてたんだけど。」

え?いきなりこういう展開ってアリ?

「俺じゃダメかな?スポーツも人並みに出来るし、頭も悪くないと思っただけど。」

「ん〜どうしよっかなあ〜。」

西城は焦らす、焦らす、焦らす。

俺は耐える。耐える。耐える。

「そんな目でみないでよ〜。仕方ないな。付き合ってあげるよ。」

「おっしやあああ!!」

「でも私、君のこと良く知らないし…。」

「俺、小谷陽介。」

「西城明日香です。それじゃあ明日から一緒に登校しようか?」

西城さんから誘ってくれるなんて、俺もう幸せ。

というわけで翌日。

俺は西城と仲良く(?)並んで登校しているのだった。

「誰?あの隣のダサイ男。西城さんと釣り合ってないよ。」

「アイツもしかして俺の西城さんと付き合ってるんじゃないだろうな?」

「俺西城さんと一緒に登校してえよ。」

「クロス、クロス、クロス。」

なんか周りの視線が痛い。

「雰囲気悪くない?」

何を話して良いか分からなかった俺は適当なことを言ってみた。

「え？そうかな？いつもと同じだよ。陽介、私と一緒に緊張してるんじゃない？」

え？今なんて？陽介？もしかして下の名前で呼んだ？？？

「今、下の名前で呼ばなかった？」

「呼んだよ。なんか変だった？」

めっちゃ嬉しいです！！

「おい、陽介！ループ×ループの新曲でたぞ！って西城さん？！」

「オッス！」

敬礼して挨拶している姿はなんと言えはいいのやら…愛くるしいぜ。

「なぜに陽介と西城さんが？！もしかして二人付き合ってる？」

茶髪でちよつと格好いいからって隆史！^{たかし}恥ずかしいこと聞くんじゃねえ！周りのギャラリーが耳を澄ませてるじゃねえか！

「そうだよお。私たち付き合ってるんだあ。」

カチーン。絶対零度に突入しました。

「マジで？」

「マジだよ。俺が西城と付き合って悪いかよ。」

「だよねえー。そろそろ急がないと二人とも遅刻しちゃうぞ。」

西城は俺たちを置いて先に歩き始めた。

「おい、隆史行くぞ。西城に置いてかれちゃう。」

俺は依然と固まったままの隆史を置いて、西城と一緒に校門を潜った。

「それじゃあ、お昼休みだね。屋上でまってるよ。」

かわいく手を振って2組の教室に西城は消えていった。

合コン計画（前書き）

少し長い目になります。
すいません。

合コン計画

俺と西城が付き合っているという噂(?)はあつという間に広まった。クラスの中はその話でもちきりだ。男子数名西城の落とし方を聞きに来た奴がきたが軽くあしらっておいだ。

「陽介、なかなかやるな。俺は西城に興味は無かったけど、まさかお前とは…。油断も隙もねえ男だぜ。」

「うるせえよ。お前の方は大丈夫なのかよ。」

「如月か？日曜、みんなでカラオケ行くことになってるんだけど、そこで近付こうって計画。」

隆史が狙っているのは如月 早紀。小説家になるのが夢らしくて、いつも教室の端っこでノートにいろいろ書いてる。眼鏡をかけていて男子どもは気付いてないんだろうけど(ていうか、影薄い…)かなりの美貌の持ち主。西城には負けるがな。ちなみに俺と如月は小学校からのダチ。

「アホらし。如月がそんなので出てくるわけないだろ。」

「それがさあ、陽介も行くって言ったらOKしてくれたんだ。」

「ほう。良かったじゃなか…。ってオイ！いつ俺が行くって言ったんだよ。勝手に決めんなよ。」

「まあ、いいじゃんか。西城も連れてこいよ。」

「俺は西城と二人だけで楽しみたいんだ。何が悲しくて合コンなんぞに付き合わなくちゃなんのだ!!」

「じゃ、如月にお前から行かないってこと伝えてくれよ。そういう事言うの苦手なんだよ。」

「分かった。」

俺は隆史に思いつきり殺気を送りながら如月の席まで向かった。

「如月、ちよつといいか？」

「何？」

「日曜のカラオケの件なんだけどさ…。」

「ああ！ようちゃんも行くんでしょ？久しぶりだからなんだか楽しみで。」

うつむき加減に頬を赤く染める。なんだか、言にくい雰囲気だぜ。「隆史が俺も行くって言ったらしいけどさ。俺、別の用事があつて無理なんだよ。さつき、隆史に言われたばかりでさ。」

「そうなんだ…。ようちゃん行かないなら私もやめとこうかな…。」声がか細くなつて行く。一体どうしたらいいんだ、俺！

「隆史とかもいるから楽しめると思うけど。」

「あんまり知らないし…。」

だんだん惨めに思えてきたよ。そうだよな。如月、俺と一緒にしないと何にも出来ないんだったよな。

「分かった、分かった。なんとか都合つけて行けるようにするよ。だからそんな顔するなよ。」

「え！？いいよ。そんなつもりで言ったんじゃないし。ようちゃん、西城さんとの用事でしょ？」

「まあ、そうなんだけどさ…。西城にも相談してみて行くようにするよ。」

「え…でも…。」

「うだうだ言うな。俺も行くんだからいいだろ。」

「うん。そうだね。ありがとう。」

満面の笑みで返してくる。眼鏡を取ったらかわいいんだけどなあ…。つて何いつてんだ俺！

自分の席に帰つてくるとニタニタ笑っている隆史がいた。

「お前も来るんだろ？」

「場所ドコだ？」

「駅前のジャンカラ。」

「何時？」

「朝の9時。」

「は?!9時だ??早すぎねえのか?」

「普通だろ。一日中歌いまくるぜ。」

「金無いんだけど…」

「歌い放題300円チケット持つてるから大丈夫。」

「で、メンバーは？」

「俺とお前、西城と如月。」

「おま…。初めから俺が来ることになってたんだな。」

「なんだってようちゃんは如月に弱いからな。」

「その呼び方するなあああ！！（怒）」

まあ、屋上で会うことになってるからその時にでも言おう。

つまらん授業を聞き流し、待ちに待った昼休み。西城の待つ屋上へ走る。

勢いよくドアを開けるとそこは…

弁当を喰うカップルだらけだったorz

俺と西城の二人きりの時間になるはずが…。そんなことよりもこの空気は正直、居たたまれない。ドアを閉めて待機することにしよう。

「ごめーん。体育だったから遅れちゃった。」

チヨロツとベ口を出して謝る姿に免じて許すことにしようか。俺って本当に弱いな（泣

「早速で悪いんだけどさ…」

西城が作ってきてくれた弁当を口に放り込んだ俺は口火切った！！
「ん？」

西城も自分で作った弁当を口に運んで固まる。

『マズ…。』

始めて二人の気持ちが一緒になった瞬間だった。メツチャ弁当不味かったけど。

「やつぱ味噌入れたのが失敗だったのかな…？」

「いやいや、味噌なんか混入してたんですか…。不味い理由は西城流のアレンジにあったわけだ。って、カラオケのときちんと言わないと。」

「それよりも、今度の日曜なんだけどさ。斉藤とかとカラオケ行かない？」

「え？本当！？すつごく歌、歌いたかったんだ！！行こう、行こう！！」

なんだ、心配するほどのことじゃなかったんだ。

「それじゃ…。」

俺たちは周りの奴らが手と手を取り合ってキスしだすまで、歌手について語り合った。

カラオケ

日曜日。カラオケ当日。

「チーズ。」

「遅いぞ、陽介！」

「齊藤くん、オハヨ。」

「西城さん、おはよう。」

なんなんだアイツのあの変わり様は。

「如月おはよう。」

「ようちゃん、オハヨ。西城さんもおはよう。」

「如月さん、西城さんじゃなくて明日香でいいよ。他人行儀じゃん。」

「え?!でも...。」

「西城がそう言ってるんだから、それでいいんじゃないか?」

俺は援軍を出す。

「陽介もいつまでも西城とか言わない!ちゃんと明日香って呼んでよね。」

「いや...その...。」

如月の普段の気持ちがよく分かるぜ...。

「まあまあ、立ち話もなんだからさっさと入ろっぜ。」

こういう時は隆史の奴、役に立つな。

「そうだね。今日はイッパイ歌っちゃおう!!」

「如月、行くか。」

「うん。」

俺たちは部屋に入った。予め隆史の奴が予約してたみたいで広くてイイ。

「さてと、ピザとポテトと...。西城さん何飲む?」

隆史の奴、妙に手慣れてやがる。さつさとオーダー出しちまった。

「そうだねえ…。紅茶」

「りょーかい。如月は？」

「オレンジジュースで。」

「はい。…注文もしたことだし、歌いますか。」

「ちよつと待てええ！俺のはどうした？？」

「え？あ、なんだ。いたのか。初めからそう言えよ。」

隆史の奴、完全に調子のとてやがる…（怒）

「アハハ。二人っていつもそんな調子なの？漫才みたいじゃん。」

「齊藤くん、今日はやけにテンション高いね。」

「そうか？で、陽介はコーラだろ。もう頼んでるって。」

チツ。点数稼ぎしやがって。

「じゃあ、初めは西城さんから。」

「ん〜じゃあ…ねえ…。」

西城が選んだのはキューティーハニーだ。んじゃ、俺もアニソン路線で突っ切ることにするか。

俺たちは散々アニソンで盛り上がって、結局夕方まで歌い通したった。

「明日香さん、もう歌えません…。」

「何いってんの？これからだよ。って陽介まで倒れてるし。」

テンション上げすぎた反動だろうか。西城の異常にまで上がったテンションに付いていけず、ダウンしてしまった。

「西城…もう無理…。喉痛いわ。」

「しょうがないな…。最後に一曲だけ。ね？」

「一曲だけだからな…。」

西城のいたいけな瞳に勝つことが出来ず、俺は氣力を振り絞って歌うことに。

「じゃ、チェリーね。」

西城と最後に歌ったチエリ。喉がつぶれてしまって声が満足に出
せなかったけど、最高のデュエットだった。

西城、怒

俺にとって西城との登校は正直辛い…。なんでかっていうと、周りの目が一番痛いからだ。女性陣は俺たちの交際を受け入れてくれたみたいだが、男性陣の（特に西城ファン）恨み・ねたみの視線が…。問題の西城はというと、男性陣の視線など軽くスルー（ってアピってる？）して、俺の腕に絡みついてきたりしている。

「陽介！話聞いている？」

「悪い。考え事してた。」

「もう、怒っちゃうよ！」

んゝ怒った西城の顔もきつとかわいいんだろうな…。って何いってんだ俺！（汗）

「ごめん、ごめん。」

「ボーっとしてるから学校に着いちゃったじゃない！知らないんだから！」

あゝあ、頬をふくらませて怒る姿もめっちゃかわいいな。

俺の妄想を振り切るかのようなスピードで西城は靴を履き替えて教室に向かってしまった。

「西城を怒らせたんだろ？」

席に着くとそうそうウザイ奴がやってきた。

「なんで分かるんだよ。」

「お前見りゃわかるよ。」

「そんなこと書いてないぞ。」

「心にしっかりと書いてあるさ。」

『…………』

こいつ、読心術つかえんのか。

「っていうのは冗談。ずっとお前の後ろにいたからさ。」
確かに隆史の手には鞆が握られている。

「で、西城はなんて？」

「遠坂恵美のライブがどうか…。」
とおさかえみ

遠坂恵美、今話題のアイドルだ。容姿、歌唱力共に完璧で、ましてやライブのチケットなど3時間で完売してしまう。まさか遠坂のライブに連れて行けって言っくんじゃないだろうな。

「マジか。お前の話信用できないから昼休み、西城に直接聞くことにするわ。」

「なんかそれって結構傷つくぜ。」

「プライドないから大丈夫だろ？」

「それもそうだがな。」

西城のことを考えていたら午前中の授業なんか一瞬で終わってしまった。そんな中、一抹の不安を抱きながら俺は午前の授業終了後屋上へ向かう。

「今朝のことなんだけどさ。」

弁当を開けていた西城の手が止まる。

「知らない。」

頬を膨らませながらまたしても怒ってしまった。

「遠坂のライブの事だろ？お、この卵焼きウメエ。」

弁当を口に運んだ俺は、お世辞なしの率直な感想を述べた。

「本当？！それ自信作なんだ。しかたないな。教えてあげるよ。あのね、お父さんに音楽関係の知り合いがいて、その人が遠坂恵美のライブチケットを2枚貰ってきたんだ！！」

西城は財布から大事そうにチケットを出した。確かに遠坂恵美のライブのチケットだ。てか、これ初回限定のかなりいい位置じゃん。

「もしかして二人でいくの？」

「あつたりまえじゃん。今週の土曜だよ。」

えーっと今日は木曜日だから……明後日じゃん！！

「土曜！？場所は？」

「厚生年金会館。電車で20分の所だよ。」

「OK、OK。予定入れとくね。」

まあ、こんな寒い時期にドコ行くか正直迷っていた俺にとってはかなりの朗報だ。西城には感謝しないとな。

「エミちゃんって私たちと同じ年なんだよ？知ってた？」

「マジ？トップアイドルだから年上だと思ってたよ。」

「あはは。それってエミちゃんが老けてるってことだよ？！それとも陽介の目が悪いのかな？」

「おいおい、からかうなって。」

せつかく話が弾んできたのに、予鈴が鳴った。ふう、帰り道でも話の続きをするか。

「陽介次体育だよね。」

「なんで知ってたんの？」

「いつも窓から見てたから。」

西城はすこし顔を赤くしてそういった。それって前から俺を見てたって事か？いやしかし、恥ずかしいな。

俺は体育を理由にその場から逃げ去るように教室へ向かった。

報告

「で、どうだったんだ？」

準備体操中に隆史が話しかけてきた。

「遠坂エミのライブに二人で行くことになった。」

周りの奴らが聞き耳を立てているのに薄々気付いていた。しかし、ここでやめると変な噂が流れちまうからな。我慢、我慢。

「もしかしてチケット西城さんに奢らせたの？」

おいおい、そんな物騒なことを言っなよ。周りの男子が殺気立ってるじゃないか。

「そんなわけねえだろ。複雑なんだが、西城の親父さんの知り合いが音楽関係の仕事をしてるらしくて、そこからチケットを入手したんだと。だから西城は一円も払ってないからな。」

「へー。羨ましい限りだな。で、チケットって2枚だけなのか？」

「そこら辺は知らんが、もし余分に合ったとしてもお前にはあげないからな。どうせ付いてくるつもりだろ？」

「さすが親友。よく見抜いたな。」

「本命は西城じゃないんだろ？」

これまで散々邪魔してくれたお礼におれは爆弾発言をやった。

「オイオイ、周りの奴ら聞いてるんだぞ。」

隆史の奴は相当焦っているらしくそつと俺に耳打ちしてきた。周りの奴らは俺たちの会話が聞けないとなるとさっそく入手した情報を議論し始めた。またたくまに騒がしくなり、体育教師の今井が怒り出した。

「コラ。何してる。ちゃんと準備運動をやれ！！」

俺はその効果に満足し、ストレッチに移った。隆史の奴は恨めしげに俺を見つめている。

ストレッチも無事終わり、高跳びの準備をしている合間にクラスの連中が隆史に聞こえないように俺に声を掛けてきた。

「さっきお前ら言ってた、齊藤の本命って誰だよ？」

ふふふ。予想通り。

「それは秘密だ。本人から聞けよ。下手に言ったら俺の命がないからな。」

隆史を怒らせたなら誰の手にも負えない。美青年の半面というものだろうか？それとも幼い頃から嫉妬でケンカを売ってくる奴らを相手に鍛えたのか詳細は知らないのだが、隆史の奴は県下屈指の危険な男としてその名が知られていたりする。

「俺らが聞いたら絶対にやられるって。親友のお前から聞きたいんだよ。」

「おい隆史！今泉いまこずみが話あるってさ！」

手に負えなくなつた俺は今泉を売ることにした。

「話ってなんだ？」

少々機嫌が悪いようだ。下手に刺激して怒らせても俺は知らないからな。

「さっきの話がちよっと聞こえちゃってさ。」

戦々恐々と今泉が話し出す。

「ほうほう、それで？」

対する隆史の目はだんだん凶暴な鬼の目になりつつあった。

「小谷と西城さんはどこまでいったのかなって？」

苦し紛れの言い訳！！コラア、今泉。逃げるんじゃないやねえ。

「なんだそんなことか。キスもしてないらしいぜ。安心しろ。お前って確か西城さんのファンなんだろ？そりゃ、気になるわな。てか、直接陽介に聞くなって大胆なことするんだな。」

あり得るはずもない解釈をしている隆史。俺は少々呆れてしまった。普通に考えて俺がそんなことでお前を呼ぶはずが無いだろう？

「ふゝ。良かった。一安心したよ。」

これ以上隆史と関わり合いたくないらしく、今泉はそそくさとどつ

かに行ってしまった。

「みんなの注目の的だな。そろそろお前のファンが泣き始める頃じゃないのか？」

悪戯っぽく隆史の奴がいつてくる。

「あんまりそんなこと言ってるとうっかり今泉に如月のこと言っぞ。」

「ここは少しばかり釘を打っておいた方がいいだろう。」

「すいません。」

からかうのはこの位にしておくとするか。アイツも心配してくれていたみたいだな。

本音トーク

まちにまった土曜日。今日は邪魔者（隆史）がいないので幾分か気が楽だ。

で、俺は何をしているかというところ……興奮のあまり駅に早く着きすぎて西城を待っている。男として遅刻は許されないからな。（言い訳）

「陽介、早いだね。」

西城は白で統一された服を着てきた。何着ても可愛いんだな。

「ちよつと楽しみでさ。」

苦笑いでごまかしておく。

「電車乗ろうよ。」

西城はお構いなし改札へ向かう。少し落ち込む俺。そんだけ西城が楽しみにしてるって事かな。

「ちよつと待てよ。」

小走りで西城に追いついた。ホームまで行くも、いざ何を話したらいいのか全く見当もつかない。

「エミちゃん新曲の『believe my love』歌ってくれるかな？」

「歌うでしょ。最近出たばかりだからあまりレパートリーもなさそうだし。」

「おお。陽介、なかなか鋭いな。」

「そんなこと無いって。」

西城に褒められた俺は照れてしまった。

「陽介？」

「ん？」

「なんか楽しそうだね。」

そりゃあ、西城さん。好きな女と一緒にライブ行くんだから最高に幸せでしょ。しかも邪魔者のいない初デートだし。

はい、しっかり動揺しちゃってる俺。西城にバレバレだな。

「ブツ。」

西城に嘖かれた、西城に嘖かれたよ。そんなに笑わなくても。こっちは結構シヨックだったんだぞ。

「な、なあ西城。本当にそう思うのか？」

「うん…アハハ……。ふう、落ち着いた。だつて早紀つてずうつと陽介のこと見てたよ。私とちよつといちやいちゃしてたらすごい目で見てきたし。でも早紀には陽介のこと渡さないもんね」

うう……。西城……。俺、感激したよ。

「西城ありがとう。」

駅が近づいてきたので、それっきりこの話はすることがなかったけど、西城の思いを始めて聞けてかなり嬉しかった。

でも如月とこれから上手く友達として付き合っていけるかどうか、不安だ。

ライブ

believe my love

私はあなたへの 思いを信じている

気づくのが遅かったけれど 辛いこといっぱいいたけど

あなたは私に 振り向いてくれるだろうか

会場には多数のファンが詰めかけ、ほぼ満員。今は遠坂の新曲を生でお披露目中。

俺はあんまり遠坂の歌が好きじゃないんだけど(っっていうか名前だけしか知らないし)この曲は気に入った。トップアイドルっていうんで結構ファンシーな曲も多かったんだけどこういうラブソングだったら結構好きだな。西城とのデートを盛り上げてくれそうだし。

この思いを あなたに

伝えることが 出来たなら

自然と脈打つ 私の愛が

あなたを包み込むでしょう

サビの部分で西城が俺にこそつと声を掛けてきた。

「エミちゃんってあんなに身長低かったっけ？」

西城に言われてみるとテレビで見るとよりか、身長が低い。所詮テレビなんだろう。

「ちょっと低いような気もするけど…。俺たちと同期だったりして

」

周りのファンから睨まれたので俺は黙ることにした。

believe my love

この愛が永遠でありますように

歌が終わると万雷の拍手。このライブ一番大きな拍手だった。

「ありがとうございます。始めてのラブソングだったのでトチっちゃった所もあっただんですけど、どうでしたか？」

遠坂の問いにファンが口々に絶賛し始めた。

「気に入って貰えて良かったです。だけど、残すところ後1曲になっちゃいました。皆さんとのお別れは非常に寂しいのですが、仕方ありません。いつもの曲でお別れしましょう！」

そう言ってデビュー曲を熱唱しながら、通路を歩き始めた。俺たちの立ち位置がたまたまその通路脇だったので、後ろから押してくるファン達の餌食になってしまい。かなり苦しかった。（おかげで西城と密着できたけど。ウヒヒ）

遠坂を触ろうと通路にはファン達の手で溢れかえっていた。遠坂は若干イヤそうな顔をしたが、すぐさま営業スマイル（？）に変わって速く切り抜けようとしているのが目に見えた。

俺たちの横を通った時にふと俺と目があつた様な気がしたが、何事もなかったように通り過ぎ、ドアから消えてしまった。

「本日はご来場誠にありがとうございます。全課程が修了しましたので……」

退場を促すアナウンス。ドアに近い方から係員が鉄柵（？）を外し、俺たちが出れるようにした。

「新曲よかったね。今度シングル借りようかな？」

「始めて聞いたけど、違った曲風もなかなかいいね。ますます人気に拍車がかかると思うよ。」

「今度また一緒に行こうね。」

「今度は俺がチケット用意するよ。」

「でも取りにくいでしょ。高いし。無理しなくてもイイよ。げ……、外雨だし……。仕方ないか、傘買ってくるね。」

西城は近くの売店に傘を買いにいつてしまった。

俺、折りたたみ持つてるのに…。今更西城の厚意を無駄に出来ないし…。

ふと周りを見回すと、女の子が困ったようにしていたので俺はその子に傘を上げることにした。西城に持つてることバレたら後々、気まずいしね。

「傘ないんだろ？これ使えよ。」

「え…、でもそんな…。」

いきなり見知らぬ男に傘使えって言われても焦るわな。普通の反応。「大丈夫だつて。んじゃ、俺はいくから。」

半ば強引に彼女に傘を渡すと俺はそそくさとさっきの場所に戻ったと、なんと実にタイミングの良いことだろう。西城が傘を2本買ってきてくれた。

「はい。サイズ分からなかったから取りあえず一番大きなのを買ってきたから。」

「ありがと。んで、いくらだった？」

「そんなのイイよ。プレゼント。」

ん。男として好きな女に金を出させるのはな…。そのかわり貢ぐ気も全くないけど。のちのちお礼になんかあげなくちゃ。

「ありがたく受け取っておくよ。電車乗り遅れたら面倒だから、行こうか。」

俺はこの時、強引に傘を渡した彼女の視線に気づいていなかった。

隆史の休日（前書き）

1000ヒット記念の特別編です。
キリ番ごとに特別編を書いていきたいと思っています。

隆史の休日

今日は日曜日。清々しい朝だ。

「隆史様、お目覚めになりましたでしょうか？」

メイドの小雪さんがいつも起こしに来てくれる。え？メイドだつて？ああ、そうか。俺の親父は齊藤財閥の会長をやつて、世間一般に言う金持ちの部類に入る。屋敷もまああの広さだから家族で管理仕切れなくて、メイドを雇つてゐるってワケ。

「起きたよ。いつもありがとうございます。」

「お気遣いありがとうございます。朝食は旦那様と一緒に食べられますか？」

「部屋でとるよ。」

「分かりました。少々お待ちください。」

実は俺と親父、結構仲が悪かったりしている。なぜかって言うと、金持ち同士の策略結婚に付き合わされるのが嫌で許嫁を破棄したから。『お前は齊藤財閥を次いで貰わなければならぬに、どうして父親が決めた嫁ではならぬのだ！跡取りとしての自覚がたらん！陽子さん以外の嫁は一切認めんからな！』らしい…。

そんなどうでもいいことは置いて、さつさと着替えを済ませて携帯をチェック。如月さんからメール届いてないかな？

Eメール13件

なんか嫌な予感するけど…。

”隆史、今日デートしよ！！”

速攻、削除。陽子からのくだらないメール。見る価値もない。

”如月さん。今日暇？良かったら遊ばない？”

11時だし、さすがに起きてるでしょ。

「お持ち致しました。」

小雪さんがカートに朝食をのせて運んでくれた。そうそう、俺が陽子を嫌う理由の一つとしてメイドさん達をバカにすることだ。彼女達のおかげで俺たちが生活していけるのにアイツはそれを当然のように受け止め、見下してさえるのだ。そんな女とは一切関わりたくないのが本音である。

「そのままでもいいから。もう下がって良いよ。」

小雪さんがテーブルに朝食を並べようとするのを俺は止めた。カートにある奴を取れば済むんだからわざわざ並べるような無駄な労力は使って欲しくない。

「ですが…。」

「いいから、いいから。他に仕事あるんでしょ？」

「ありがとうございます。ご厚意に甘えさせて頂きます。」

小雪さんは一礼して部屋から出て行った。

朝食を食べ終えたらドコに遊びに行こうかな？

You got mail!!

厳ついオッサンの声でメールの着信を知らせる携帯。

「ようちゃんも一緒ならいいよ。」

「あいつ今日西城さんとデートだよ。」

「あ、そっか。何するの？」

「特に決めてないけど…。ドコ行きたい？」

「本屋さん」

いや、本屋って…。そりゃ、作家目指してるんだから分らないことも無いけれど…。

「OK、OK。それじゃ、迎えに行くから待ってて」

「はい」

そういえば、如月さんが俺と一緒にドコに行くのって初めてだよな。でも、本屋でデートって…。ま、二人で行けるだけマシか…。

俺は素早く身支度を済ませ、カートを厨房まで運び、全速力で如月の家に向かった。

「お待たせ。」

如月は玄関前で待っていてくれたみたいだ。

「早かったね。」

「普通だろ？んじゃ、早速本屋行くか。」

俺が若干てんぱってるのを気付かれないように足早に本屋へと向かった。

俺が案内したのは、この地域じゃ一番大きな本屋で立ち読みOKの店だ。うちの系列なんだけどw

如月は目をキラキラさせて書棚に飛び込んでいった。

「上のカフェにいるから。」

こういうときは一人の世界にさせた方が良い。名残惜しいがカフェでくつろぐことにした。

冬の空、暖房の効いた暖かな部屋にいとウトウトしていつの間にか眠ってしまったみたいだ。如月が揺すって起こしてくれた。

「悪い。ついねちまって。」

「ごめんね。私もつい夢中になっちゃって。」

申し訳なさそうにする顔に俺はつつい赤面してしまった。

「顔赤いよ。風邪でもひいちゃった？」

「大丈夫、大丈夫。」

俺はそつといつものポーカーフェイスに戻り取り繕った。

「ならいいけど…。そろそろ帰ろつか。」

時計を見ると7時を過ぎていた。俺どんだけ寝てたんだよ。思わず苦笑してしまった。

「そつだな。帰ろつか。」

如月を家まで送り、屋敷へ戻る道すがら携帯が鳴った。

”今日はありがとう”

なんにも楽しめなかったけど、如月が喜んでくれているみたいだからよしとしようか。

進路

西城とのたのしかったライブも終わり、寒風すさむ12月。

我ら中3は入試前、試験勉強踏まえ進路相談をすることになり、俺たちは図書室へいつていた。

「ようちゃん、ここ間違ってるよ。」

すかさず如月が訂正する。如月あなどれん。

「如月ってどこの高校行くんだ？」

「ようちゃんは？」

「俺は泉ヶ丘にいくつもりだけど。」

「そっかあ…。んじゃ私もようちゃんと同じにするね。」

「俺より出来るんだからもっと上の高校行けばいいのに…。」

「そうだよ。俺と同じ清陵にすればいいじゃん。」

横から唐突に隆史が口を挟む。以前はウザイの一言であつたが、前回西城に言われてから妙に如月を意識してしまっているので、隆史は救世主のように思われた。

「清陵って…斉藤くん頭いいんだ。」

今気づいたかのように言う如月。そりゃ学年一位の才女からしたら俺たちなんか…。

「え…、一応俺学年5位なんだけど…。」

如月に少しでもアピろうと、必死に勉強した隆史君。上位になればそれないりに目に付きやすいので覚えて貰えると思っていたのだ。

「ごめん。全然気づかなかった。そっか学年5位か。だったら清陵なんか楽勝だね。」

二人が盛り上がっているスキに俺は西城と話をしようじゃないか…！

「西城はどこにいくの？」

「敬愛だよ。」

え…。

俺は固まってしまった。西城と同じ高校に行こうと思っていたのになんと西城は女子校にいくと言うのだ！！

「そっか…、敬愛か…。合う機会が少なくなっちゃうね。」

俺は西城と別れてしまうのではないだろうかと不安で堪らなかった。「そうだね。でも、メールとか電話とかできるじゃん。それに女子校なんだから他の男に惚れることなんかないよ。」

どうやら西城は気を使って言ってくれたらしいが、俺には『他の男』という言葉が銃弾のごとく心臓に突き刺さった。

「そうだよな。女子校なんだからな。杞憂だったよ。」

笑いながらごまかしても心の隅にあるモヤモヤは消えなかった。

「ん、どうしたんだ？」

隆史が落ち込んでいる俺に気を利かせて話しかけてくれた。

「西城は敬愛に行くんだってさ。同じ高校行こうと思ってたから結構シヨックで。」

西城には聞こえないように隆史に耳打ちした。

「そっか。でも女子校なんだからそんなに心配することないだろう？」

「西城も同じ事言ってたけど、なんかモヤモヤした物が消えなくてさ。」

「心配しすぎだって。西城だってお前のこと好きなんだから気にすること無いさ。」

うつ…。持つべきは親友と上手く言ったのもだ。

今日はこれでお開きになったが正直なところ俺の不安はぬぐえなかった。

回想

月日が経つのも早いものだ。

気がつけばもう2月。入試シーズン真ただ中。

俺は如月と隆史の3人で泉ヶ丘に受けに行った。俺はさほど成績が悪く無いのでなんとか全部書くことが出来た。あとは結果を待つのみ。

「簡単だったぜ。」

隆史はとってつけたような嫌みを俺に向かって言う。

「清陵いけよ、清陵。学年1位のお前がこんな学校受けるのがそもその間違いなんだよ。」

「親友と一緒にじゃなきゃ、高校生活もエンジョイできないだろ？」

何が親友だ。如月のことが好きで如月と一緒にの高校に行きたかったくせに。

「ホントのこと如月に行っても良いのか？」

嫌みを言う奴には弱みで反撃だ。我ながら良い作戦だと思う。

「ちょ……。それだけは勘弁して下さい。」

ふ。勝ったw

「さっきから何話してるの？」

校門付近で話し込んでいたから如月が来たことに全く気付かなかった。あぶねえ、あぶねえ。

「テストのことだ。」

とってつけたような笑顔で返す隆史。うゝむ、さすがのこいつでも動揺したと見える。

「そっか。難しかったもんね。」

そんな笑顔でいわれましても…、正直私目にとっては難しかったです、ハイ。

「簡単、簡単。ま、ここにひとり頭抱えてる奴がいるけどな。」
そっと俺を見つめてくる隆史。ウヌヌ、許さん！！

「ようちゃん、大変だったんだ。てかさ、なんでここ選んだの？」

「俺が行ける高校じゃ、ここしか軽音部が無かったんだ。仕方なくここにしたらワケ。」

「そっかようちゃんギター引けるもんね。齊藤くんも確か、ドラムできたんじゃないっけ？」

「ああ。俺と陽介は音楽で仲良くなったみたいなものだから。あの当方で俺のリズムについて来れたのはコイツ一人だけだったからな。」

「もういいって、早く帰ろうぜ。」

正直昔の話をされるのは恥ずかしい。それにいつまでも校門で立ち話って言うのもなんだしな。

「なあゝに恥ずかしがってたんだよ、お前。話させたくないんだろうけど、歩きながらも俺は話すからな。えっと、続きなんだけど、如月はコイツのギターテク知ってるよね？」

「知ってるよ、幼稚園からずっと一緒だから。」

ああ、そういう言い方するのはやめてくれ。隆史はお前のこと好きなんだぞ。でも、お前は俺のこと好きらしいし…。どうして周りの奴はこんなに悩ませるんだよ！！（怒）

「そうだったね。で、俺はドラム昔からやってただけど、中学で吹奏楽に入って腕を立たせようとしたんだ。周りの奴が下手すぎて、曲に俺のドラムが合わなかったんだ。で、結局は吹奏楽やめることになったんだけど…。それはさて置きやめてからちよっとしたら部員の奴が俺の所に来てさ、俺に合うギターを弾く奴がいるって言いに来たんだ。」

「それがようちゃんってワケだ。」

「大正解。それで早速コイツの教室に行って聞かせてもらったんだけど、正直驚いたね。この年でこれだけの腕を持つ奴がいるのかって。で、そのあとセッションしてみたら今度は俺の方が置いて行かれてね。家に帰って必至で練習して今では同じレベルでセッション出来るようになったけど。あのころが一番楽しかったよな。」

なんでいきなり俺に振るんだよ（怒）

「俺、軽音部に入るけどお前はどっするんだ？」

「お前と合うような奴はそうそういないだろ。仕方ないから俺も入ってやるよ。」

「二人とも結局は青春してるんだね。」

「そういえば如月って何部にはいるんだ？」

「作家志望だから文芸部じゃないのか？」

「ようちゃん大正解 文芸部だよ。」

「そういえば如月の本見たこと無いな。お前は見たことあるか？」

「俺もないな。いつも書いてるけどあれってどうしてるんだ？」

「あれはね、私のホームペに掲載してるんだよ。」

「へえ、アド教えて。」

おお、隆史。如月の作品読んで話題増やそうって魂胆だな！その調子で如月の気持ちを俺からお前に向けさせてくれ！！俺は応援してるからな！！！！

「やだよ。恥ずかしいもん。」

「お前も何とか言ってくれよ。如月の本読めないじゃん。」

「本人が嫌がつてるんだから仕方がないんじゃないか。」

「さてはお前アド知ってて教えないっていうんじゃないだろうな。」

「いや……ホントに読んだことも、サイトに行ったこともないし……。」

「え……。ようちゃんホント？」

しまったああああ！！感想聞かせてって言われてたんだああああ！！墓穴ほっちまった。

「何？しってるのか？教えろおおおおお！！」

そのあと隆史の奴に首を絞められてあやふやになったが意識が薄れる前に悲しそうな顔をする如月が見えた。

結果発表

ついに合否通知が家に届いた。

俺は一抹の不安を抱きながらそつと封を切った。なにしろやけに薄かったから。

通知

小谷 陽介様

あなたは本校の入学試験において優秀な成績を修め、合格したことを通知致します。

期日までに本校窓口にて……（以下略

はい？え……。合格？紙切れ一枚しかないのに？あ、でも手続きしろって書いてあるな。やったぜええええ！！神様ありがとう！！菅原道真ありがとう！！

俺はニヤケ顔で登校した。好都合なことに今日が卒業式。内の学校やけに早いんだよな。

「陽介どうだった？え？俺か？ふ、愚問だな。もちろん合格だぜ。」
なに自演してんだよ。ホントお前といると疲れるわ。

「合格したよ。」

「え？マジ？本気でいつてんの？お前が受かった？」

こ……こいつ……。殴り殺してやろうか……（怒

「ようちゃんお早う。通知届いてたよ、見た？」

「こいつ受かってたらしい。地震かなんか起こるかもな。」

そんなに俺が受かったことにどろいてやんのか。

「よかったじゃん！！私も受かってたよ。んじゃ、学校終わったら手続きしに行こう……。」

あゝ西城無事に敬愛受かってるかな？心配だな。敬愛以外受けてないしな。あんな必死な西城初めてみたよ。でも可愛かったな。

一人でデレデレしてたら、いつの間にか学校についていた。

周りをキョロキョロ見渡すと案の定、西城の周りには男子が群がっていた。見つけやすくして楽なんだけど、なんかな…。

「西城？ちよつといい？」

声を掛けた瞬間今まで温かった周りの目が一瞬にして殺気を帯びた目に変わった。

「あ、陽介。今来たところ？」

「そうなんだけど…。ここじゃなんだから移動しない？」

うゝん。周りの男子が気になって上手くいえないな。

典型的なパターン、体育館裏。

「西城、敬愛受かった？」

「受かったよ。これも陽介と初詣に行ったからだね。」

満面の笑みで言ってくれるけど、西城と離ればなれになっちまうなんて、俺にしたら大事件なんだけどな。

「俺も受かったよ。これも西城と初詣に行ったからだね。」

俺は自分の不安を表情に出さないようにめい一杯努力した。正直なところ結構シヨックで、泣きそうだったんだけどな。なんか嫌な予感がして。

「卒業式始まっちゃうよ。教室に行かないと。」

西城は言い残すと走って言ってしまった。俺はどうしても追いかけることが出来なくて、胸が詰まって苦しくて。でも、別れるわけじゃないから泣けなくて。しばらくたたずんで気持ちの整理をしていたら教室にいくのが少し遅くなってしまった。

「ドコ行ってたんだよ。」

「ちよつとな。」

「ふゝん。俺には関係ないから別にいいや。」

そう、詮索しないところが隆史のイイ所なんだが…。

「ボーっとしてないでさっさと並べよ。正直邪魔だぜ。」

一言多い。いつか必ず葬り去ってやる！！（怒

「うつせー。」

俺は隆史に向かって出来る限りの殺気を送りながら、しゅしゅ並ぶことにした。

涙の卒業式

『……3年間の課程を修了し卒業する者、1組 新井 晋司』
『はい!』

毎年見てきた卒業式。だけど、いざ、自分たちの卒業式だと思うと少し違ったように思える。そう、神聖な儀式のような。

滞りなく卒業証書の授与は終わり、これも恒例の送る会。各学年が歌を歌うというこれまた典型的な儀式(?)を終え、俺たちの退場。

仰げば尊しなんて古くさい曲に涙を流しながら退場する、同期の奴ら。別に感傷的な気分にもならずシレっとした表情で退場した。隆史も面倒くさそうに歩いている。

教室に戻れば担任からの訓辞(?)があり、家庭・学校・生徒の三者一体で別れを惜しむどことの卒業式と変わらない光景なのだが、俺は以前嫌な予感がして感傷的な気持ちになれなかった。

「陽介、ちよつといい?」

教室から出て、帰ろうとした俺を西城が呼び止めた。

「ん?」

西城が何か言いたそうにしていたのもつかの間。熱烈な西城ファンに取り囲まれてしまった。

「後で連絡するからー!ー!ー!」

彼らに拉致られていくのを尻目に普段なら救出する俺はそのまま帰ることにした。

なんだか今、西城に触れてはならないような気がしたのだ。そう、恐れていたことが現実になってしまうようで…。

その夜、部屋で死んだように沈んでいたら携帯が鳴り響いた。

西城からのメールだ。

” 今から公園にこれる？ ”

” いく ”

公園に着くと既に西城はブランコに座っていた。

「何？」

俺の顔を見て西城は一気に言った。

「もう、つき合えない。」

俺の予想が的中してしまった。

「なんで……。」

「初めに言っただじゃん。『そんな目で見ないで。仕方がないからつき合ってあげるよ。』って。もう、私たち中学生じゃないんだから今日で期限切れ。」

「じゃあ、今までの……。」

「演技じゃないよ。恋愛感情はなかったけど。多分私って誰も一生好きになることないな。だから、私たちはおしまい。今までの事忘れて、ね？恋人から友達にもどろ。」

西城はそう言い残すと、帰ってしまった。俺は追いかけることが出来ず、『騙してたのか！』って怒ることも出来なかった。全部予想してたことだったから。

辛くて、悲しくて、胸が張り裂けそう。俺は誰もいない公園の片隅で一人泣いた。分かっていたのに、分かっていたのに。それでも俺は分からないフリをして、分かつともせず、ただ偽りの思いだと信じてたのに。

嗚呼、実際に言われると辛いよな。

この世界がモノクロに見えて

なんの為に生きてるのか分からなくて

『つき合えない』って言葉が耳から離れなくて
神様は残酷だよ。

慰め

「元氣ないな、なんかあったのか？」

「西城と別れた。」

「なんで？」

「西城がもう、つき合えないって。仕方なしにつき合ってたんだって。誰も一生好きになることなんてないって。」

「そっか…。大変だったんだな。」

「……」

「どうせ、暇なんだから明日俺の家に来いよ。」

「そんな気分じゃない。」

「いつまでも落ち込んでたって仕方ないじゃないか。」

「だけど…だけど…」

「だけど何だよ？うすうす気づいてたんじゃないのか？」

「……」

「覚悟出来てたって辛いよな。」

「……」

「明日、朝迎えに行くから今日はゆつくり寝ろよ」

隆史は用件だけ伝え、俺の返事を聞こうともせず切った。

「ツ…ツ…ツ…」

いつまでも聞こえるその音は、俺の胸に必要以上に響いて耐えきれなくなつて。携帯を閉じた。

いつの間に寝ていたんだろう。目が覚めると朝で、俺の目の前には隆史の顔があった。

「朝からうぜえな。」

「人が心配して来てやったのにそういう風にいうのかよ。」

「うるせえよ。てか、何勝手に俺の部屋に入ってたんだよ。」

「叔母さんがイイって言ってたぞ。」

「本人の許可を得るのが普通だろ。」

隆史の抗議の声を無視してさっさと着替え始めた。

「…さっさと顔洗えよ。最悪だぜ。」

「マジで？」

「目なんか充血してるし。こりゃ、化けモンだぜ。」

「うるせえ。顔洗ってるからおとなしく座ってる。」

洗面台の鏡を見て驚いた俺、確かに化けモンだ。ひでえ顔。

目尻とかをマッサージしながら念入りに顔を洗った。さっきよりかはだ大分ましになったな。

「おい、コラ。なにいじってんだよ。」

部屋に戻る隆史の奴が引き出しの中を物色していた。

「エロ本の一冊でもあるのかなぁなんて。」

言い訳だっ事がすぐに分かった。西城に関係する物でも探してたんだろ。ま、全部捨てたけどな。今では苦い思い出ってことしてる。

「んなもんねえよ。ほら行くぞ。」

俺は強引に隆史を引っ張って、家からでた。

「お前が車なんて珍しいな。」

「二人でゆつくり話したかったからな。」

そこには黒塗りのベンツが停めてあった。

「乗れよ。行くぞ。」

半ば強引に俺を乗せ、隆史は運転手に合図した。

「思ったより元気そうだな。」

「ガラにもないこと言うなよ。」

「もっと沈んでるかと思ってたんだかな。初めて好きになった相手だったんだろ？」

フ…、何もかもお見通しか。

「……。」

「でもな、俺の恋いも叶いそうにないんだよな。」

「なんで？」

俺は驚いた。初めて弱音を吐いたのだ。

「如月はどうもお前の事が好きみたいでな。俺がどんなに振り返って貰おうとしても、お前しか目にないみたいだからな。」

「そうか…。気付いてたのか。」

「まあな。」

「……。」

「……。」

「お前…、辛くないのか？」

「そりゃ、辛いよ。どんなに尽くしても絶対振り向いてくれないんだからな。」

「強いな、お前。俺もそんな強さが欲しいよ。」

「俺よりお前の方が強いだろ。俺なんか振られたりしたら生きて行けそうにない。」

「でも、生きてたらいつかチャンスが巡ってくるかもしれないだろ。」

「

「それもそうだな。」

なんだかんだ言って、隆史の奴は俺のこと心配してくれただんだ。どうせ、アイツのことだからセッションの誘いだろ。今日は久しぶりに本気で弾いてみるか。

入学式

隆史のおかげで何とか立ち直れることが出来た。あの時アイツが手を差し伸べてくれなかったら、今頃俺は…。

「入学式早々から大変だな、お前。」

女子に囲まれている隆史に向かって俺は冷笑してやった。

「おま…。自分じゃないからってふざけやがって。」

「羨ましいぜ、全く。俺もそんなにモテたらいいんだかな。」

「おい、待て！置いて行く気か！！」

俺は隆史を放っておいてさっさと教室に向かうことにした。今更爺臭いって言われるかも知れないけど、あの時、俺が一番輝いてた時期なんだろうな…。っと良い思い出にしておくって決めたんだった。教室をざっと見回すと既に何人が親しそうに話していた。何にも変わらない普通の光景。

「ふう…。苦勞したぜ。お前後で覚えとけよ。」

しばらくして全力疾走した後のような荒い息で俺の隣に座る。おい、出席番号順だろ。てか、教室中の女子全員、隆史の事LOCK ONしてるし。モテる男は大変だね。

「大変だな。ま、俺には関係無いんだけどね。」

「人ごとだと思っただいいい気になりやがって。」

「実際人ごとじゃん。」

「う…。」

勝ったぜw

「で、部活どうするんだよ。お前ドラムやりたかったんじゃないかってっけ？」

「まあ…そうだけど…。お前は？」

「俺は入らないよ。面倒だし。」

「じゃ、俺もやめとく。お前じゃないと合わないし。またやめるこ

とになるだけだし。」

俺たちがベラベラ話している間に担任らしき先生が入ってきた。

「これから一年間担任をする篠山^{ささやま}だ。手始めに自己紹介してもらうか。」

チツ、面倒くせ。適当に言っ流しとくか。

「小谷 陽介です。どうぞよろしく。」

シレッと済ませとくに限る。誰も聞いてないだろうしな。だけど隆史の時は凄まじかった。女子の好奇の目にさらされ、男子の激しい憎悪と嫉妬の目を向けられたんだからな。

もう慣れてるけどw

これからこの高校で色々あるんだろう。

中途半端な転校生

入学して一週間になる。

隆史はいつも女子に囲まれ、男子から睨まれている。アイツが俺に助けを求めるから、俺にも時々女子がきて

「齊藤君のメルアド教えてよ。」

と、かなり迷惑なことを言ってくる。教えたらおもしろいことになるんだろうけど、後からどんどん甘えてくるからここは冷たく

「悪いけど、アイツから直接聞いてくれない？」

って突き放す。そうすると大抵の奴はどっかいくんだけど、自分って可愛いとか思ってるナルな女とかはかなりしつこい。上目使いで言ってくるんだけど、そんなのに全く興味がないからスルー。

ま、こんな感じが続いて俺たち二人、特に俺はクラスから浮いている。

「今日は転校生を一人紹介するぞ。」

篠山がいつになく上機嫌で朝のHRで告げた。

はあ？転校生だ？この時期にここに来るって事は前の高校でかなりヤバイことしたってことだろ？よく受け入れたな。どっかのボンボンか？

「入ってこい。」

入ってきたのは普通の女子。だけどクラスの奴らは雄叫びを上げていた。まあ、大抵の女子は全部隆史に持って行かれてるから納得といえは納得。

「自己紹介して。」

篠山の奴、女子一人になにデレデレしてんだよ。キモイな。

「初めまして。遠坂エミです。突然でビックリした方も多いと思いますが、仲良くして下さい。」

俺は呆れてつい、隆史に耳打ちしてしまった。

『なにアイツ？ナル？』

『は？お前気付いてないの？ナルとか言ったら他の男子に殺されるぜ。』

『なんで？実際ナルだろ？突然でビックリとか…。』

『遠坂エミだぜ。お前西城さんとライブ行っただろ？』

『たんなる同姓同名だろ？てか、仮にアイドルだとしても興味ないし。』

隆史としゃべっていたのが目立っただろうか？遠坂は俺をじっと見つめていた。正直言っただけ悪い。

自己紹介も終わり、まだ出席番号順（っていつても隆史と交代した奴以外）で座っていたので一番後ろの席に座るように言われていた。

一週間もするとオリエンテーションとかで授業をやらないうて言うわけでもなく、普通の授業を始めた。中学の時と何一つ変わらない暇な授業。興味ナシ。爆睡あるのみ！！

3時間ぶつ通しで寝続けた俺は、如月につつかれて起きた。

「ようちゃん、寝過ぎ。ご飯食べよ。」

あゝあ、もう昼休みか。寝てても腹は減るモンなんだな。

「外いくか。」

例によって女子に囲まれている隆史に気付かれないようにして教室をでようとした。

「おい、待て！俺も行く。」

女子達を振り切って隆史の奴は追いかけてきた。男子達は遠坂を包囲してるから、教室はガランとしている。邪魔なのはイスと机だけだ。

「女子連中がウザイから屋上いこうぜ。」

隆史の奴は強引に如月を引っ張っていく。

「屋上って閉鎖されてなかったけ？」

「合鍵持つてるから問題ナシ。」

いつの間に合い鍵なんて作ったんだよ。それはあとでじっくり聞こ

うか。俺も欲しいし。

屋上は眺めが良かった。誰もいない3人だけの昼飯。如月も隆史も嬉しそうだ。

「ようちゃん、元に戻っちゃったね。」

いきなり言われてビックリした。元に戻ったって何？

「はい？」

「だって西城さんと付き合ってた頃はすごく優しくかったよ。心の窓も開いてたし。普段見せない表情とかしてたし。」

気付いてたんだな如月。

「そうか…。俺って変わってたんだ。全く気付かなかったな。」

「俺は気付いてたぜ。」

「え？」

「トゲトゲしく無かったしさ。話してても別人かとおもっちゃったぞ。」

「恋は盲目ってよく行ったもんだな。全く気付いていなかったよ。」

「寂しそうだよ。ようちゃん。」

またしても如月の言葉に驚いた。

「昔はそんなこと無かったのに。」

昔…昔は…そうだな。俺には昔ギターっていう熱中することがあったんだな。それを生きがいにしてたような気がする。今は……

「今からでも遅くない。軽音部に入ろうぜ。」

「そうだよ。私が歌詞書くからようちゃんと齊藤君で曲創って歌ってよ。」

ん…。ま、何もしないよりマシか。

「そうだな。入るか。」

生きがいを見つけて、モノクロの世界が色を持つようになった気がする。

出陣！軽音部

だいたい部活が決まって活動始めてる時期に、俺たちは軽音部の顧問に頭を下げて入れて貰うことにした。

「もうちよつと入るのが早かったらバンド組めたのに。全員メンバーが決まってるから悪いけど、お前ら二人でバンド組んで貰えない？」

傲慢そうな部長だ。ま、俺ら二人つてのは昔っから決まってたことなんだけど…。

「構いませんよ。中途半端な時期に来た俺らが悪いんですから。」俺が一応、一応部長に謝罪しとく。仮にも部長なんだし。

「おやおや、部長。可哀想じゃありませんか。ループ×ループのベースの僕がココにいると知って入ってきたに違いないんですから。」そうでしょう？とでも言いたげな目で俺たちを見てきた。誰だコイツ？

「羽柴、それはないと思うけど…」

あの傲慢そうな部長が遠慮してる？ますますわからん。

『お前興味ないから知らないと思うけど、人気グループのベースしてるんだぜ。こんなナルだとは思わなかったけど。』

隆史が気を遣って耳打ちしてくれた。

「僕に懂れて入ってきても楽器が弾けないと、話にすらならないからね。ちよつと弾いてみてくれる？」

う…、ムカツク。

俺は隆史に目で合図を送った。隆史もさうとうムカツイているようだ。

1、2、3！

俺たちが初めてセッションした曲を弾いた。

隆史の雷鳴の様なドラム。

俺の嵐のように豪快でかつ、繊細なギター。

2つは混ざり合い、溶け合い、一つの綺麗なメロディーとして収束した。

ほんの5分のセッションだが、周りで練習していた他の部員はいつの間にか聞き入っていたようだ。

驚愕の表情。羽柴とかいうムカツク野郎も啞然として見ている。

そして万雷の拍手をしたのは軽音部の顧問の中杉。

「100年に一人の逸材だね。二人とも素晴らしかったよ。」

「ありがとうございます。」

ここは素直に礼を言うに限る。ややこしいことになるだろうからな。つてか中杉何もんだよ。

「あ、じゃ、二人とも練習頑張つて下さいね。」

そそくさと逃げる羽柴。さっきまでの自信は何処に。見てて気分がよいがな。

「楽器の方は問題ないみたいだな。うちの文化祭夏にやるからその時が俺たちの見せ場。それまでしっかりと練習してくれ。」

部長もさっきまでの傲慢さは何処に。これも見てて気分がいい。

「二人でなにかと大変だと思うからアシスタントを付けるよ。山口さん、来て。」

隅のほうで機器をいじっていた女の子がこっちに来た。

「山口さん。さっき入部した二人。さっきの演奏聞いてたでしょ。」

二人の専属アシスタントして貰えるかな？

「はい、分かりました。えっと…、1年3組の山口 優香です。よろしくお願いします。」

「俺はギターの小谷 陽介。こっちはドラムの齊藤 隆史。」

「よろしく。」

隆史の奴愛想笑いしやがった。多分この女落ちたな。

「私、齊藤くん知ってるよ。女子の間では超イケメンが来たってかなりの噂になってたから。」

「ありがとう。」

「まだ、機器のメンテ終わってないから、またね。」

マイペースな奴、という評価をおれは山口にした。

「隆史、惚れたか？」

「冗談。俺は如月一筋だ。」

「結構なことだ。」

俺たちはその後、これからのことを話しながら帰宅した。

歌詞決定

軽音部に入部してはや1週間がたった。

いつの間にか俺たちのテク（？）は尾ひれがついて学校中に知れ渡り、隆史ファンが急増。昼は屋上へ避難せざる終えなくなつた。クラスの俺に対する姿勢も変わり馴染み始めた今日のこの日この頃。

「相変わらず男子共は遠坂一筋だな。」

俺は呆れたように隆史にささやいた。

「女子も遠坂の所へ行つてくれたら俺は言うことないのに。」

「みんなお前の本性を知らないからだろ。」

おれは悪戯っぽく笑う。

「それを言うな。それを」

やつぱ熱中することがあれば男は輝くんだな。以前より笑うことが増えた気がする。

「気づいてるか？授業中とか遠坂ずつとお前のこと見てるんだぜ？」

「は？なんで俺？隆史の勘違いだろ？席、隣通しだからそう思うだけであつて……」

「それがな、移動教室の時も必ずお前の後ろについて歩いてるんだ。この前なんか声掛けようとしたんだと思うんだけど、男子連中に邪魔されたみたいでさ。すつごく切なそうな顔してたぜ。」

「俺なんか落としたかな？今度遠坂に聞いてみるわ。」

隆史の奴は意味ありげな笑みを向けてくる。なんか腹立つわ。

「で、如月に歌詞作つてもらうように頼んだのか？」

「ああ、そうだった。忘れてた。最近如月、文芸部の方で忙しいみたいでさ。どつかの雑誌のコンクールに出品するって言ってた。」

「流行のアレか。大賞取つたら出版してくれるって言う奴だろ？出版社も小賢しいことするんだな。」

「そつでもしないと生き残れないんだろ？仕方ないんじゃないか？それでも出品したいって人もいるんだしさ。」

「そうだな。俺たちもバンドでそう言うのがあれば参加しているし。」

「人のこと言えねえじゃん。」

俺たちは放課後まで笑い合っていた。もちろん授業など聞く気なし。周りに迷惑掛けないように携帯のメールでやりとりしてた。

「お待たせ!!」

部活を終わらせた如月が走ってくる。俺たちはいつも3人で帰るところにしているんだ。

「小説の調子はどう？」

隆史の奴、点数稼ぎに入りやがった。俺はこの二人が付き合うことを望んでるんだがな。

「手直しの段階に入ったよ。もう少しで出品できそう。」

嬉しそうに微笑む如月。熱中するものがあれば男のみならず人間輝くんだな。

「で、ようちゃん歌詞書かなくてもいいの？」

いきなり本題を振られた俺はドキツとしてしまった。

「あ・ああ。その事なんだけど、頼もうと思ってたんだけどさ。最近忙しそうなんで落ち着いてからと思つて……。」

ヤベエ動揺しまくり。言い訳っぽい感じになつてゐるし（汗、汗

「そうなんだ。エヘヘ、実はもう書いてたんだ。」

そういつて如月は鞆から一枚のルーズリーフを取り出した。

「文化祭ようなんでしょ？季節が夏だからこんな感じでいいかなつて？」

サンシャイン0194

煌めく太陽

立ち上る陽炎

そう夏真っ盛り

気温がなくて

暑苦しいけど 息苦しいけど

行こうぜ 夏祭り

The summer festival

夜空に輝く花火

太陽のごとく光 照らす

哀愁漂わせる僕らを一掃する

夏の風物詩

恋人達の物語

全てはこの時のために…

輝くファンタジスタ

夢のような夏を超えて また一つ思い出を創るんだ

未来に続く夏物語り

また来年も創れるかな？

叶わない儚い恋も

叶わない儚い夢も

叶わない儚い明日も

ボクらが変えて行くよ

その思いでは永遠の詩となり 少年達の記憶に

刻まれる

永遠に

またこの場所できつと会おう

「おお、さすが如月。イイ歌詞書くじゃん。」

俺は如月の文章力に改めて脱帽した。俺たちだけじゃきつとこんな
イイ歌詞は掛けなかったはずだからな。

「久々に腕がなるぜ。」

隆史も上機嫌だ。あと数個歌うつもりだけど、それは俺たちで考
えるとするか。

新メンバー？

歌詞も決まったことだし俺たちは順調に練習を続けていた。もちろん歌詞作りにも余念がない。

青春のページ

おっとそうそう。遠坂に落とし物のこと聞かないとな。今、教室の中で二人つきりだし声掛けてみるか」

「遠坂？俺なんか落としてたっけ？」

「え？」

ま、当然の反応だわな。

「いや、隆史の奴、遠坂が俺に話したそうにしてるって言うんでちようど、歌詞書いた紙無くした所だしさ。」

「歌詞については知らないけど…。傘なら…。」

「傘？」

入学してから一度も雨なんて降っていないのに傘なんか落とすはずがない。俺は遠坂が別の意味で心配になってきた。中途半端な時期に転校してきたのも分かったような気がする。

「うん…。」

「そう言われてもねえ。雨降ったことないじゃん。大丈夫？」

「そうじゃなくて、私のライブ見に来てくれた日に…。」

ああ、そう言えば女の子に傘あげたよう…。え？ちよつと待て。なんで遠坂が持ってたの？

「あれって遠坂だったけ？」

「うん…。」

恥ずかしそうにうつむく遠坂。トップアイドルなのにこんな事ぐらいで恥ずかしがるなよ。

「そっか。ありがとうな。」

俺は礼を言っただけで傘を受け取った。ずっと傘返したかったんだろう。

「小谷くんって軽音楽部なんだよね？」

「そうだよ。俺と隆史の2人だけ。人数全然足りないから俺がボーカルすることになってさ。部長達の視線もやけに冷たいし。」

「よければ、私がボーカルしようか？」

「はい？今なんと？」

例によって恥ずかしそうにうつむく遠坂。少しだけ愛おしさがこみ上げてくる。あ、恋愛感情とかは関係ないからw

「でも…、遠坂仕事とかあるでしょ？」

遠坂を引き込んだらさすがに部長とか羽柴の奴がうるさそうなので、遠回しに断っておく。

「それは大丈夫だよ。二人の伴奏ダビングして楽屋とかで練習すればいいんだし。」

そんな笑顔で言われたら断る物断れないし…。仕方がない、ちょっと辛いかもしれないが現実を見て頂こう。

「俺たちに合うかどうか一回試してみるか。放課後、部室に来て。」
俺はこれ以上、何か言われたら困るので足早にその場を立ち去った。

移動教室 美術

先ほどのことを隆史に話すと案の定、ニヤニヤしだした。殴り倒しそうになるほど腹が立つ。

「あのアイドルがねえ。良かったじゃんか。」

「良くない。正直迷惑だし。また部長とかに言われるだろ？」

「そりゃあそうだが…。」

「それに羽柴の奴に『ボク達を恐れて遠坂さんに頼み込んだのでしよう。』とか満面の笑みで言われたらムカツいて仕方ない。」

「でも、当の本人は本気なんだろ？どうやって断るつもりだよ。」

「わざと合わないような曲を弾いて諦めて貰う。+部長と羽柴の嫌味も混ざれば効果覲面だろ。」

「むごいこと考えるんだな。」

呆れたような顔をされても俺は断固として遠坂を受け入れない姿勢

を保つ。

そして運命の放課後、部室。

いつも通り俺たちは隅のほうに追いやられ（いつか必ず部長を叩きのめす！）練習をしていた。周りの連中も俺たちのことなどお構いなしに、弾きまくる。何が何の音だか分からない状態だった。

「今日って遠坂さんくるんでしょ？」

この女、ドコでその情報を入手したんだ。

「そうだよ。」

おれは素っ気なく答えた。

「小谷君もなかなかやるわね。他の男子に邪魔されたでしょ？」

「いや、あいつが来たい、やりたいっていうから仕方なしに。ホントはやらせたくないんだがな。」

「え？どうして？彼女トップアイドルなのよ。当然歌もそこの人より断然上手いはずじゃない。」

「遠坂だから気に入くわない。羽柴や部長にまたブチブチ嫌味を言われるだろ？」

「それもそうね。ま、頑張つてね。」

どいつもこいつもニヤニヤしやがって。

と、騒音が鳴りやんだ。遠坂のお出ましか。あんまりやりたくはな
いんだがこれも諦めて貰うため。いっちょ、いじるか。

俺は重い腰を上げた。

如月の休日（前書き）

2000ヒット特別編

如月の休日

ふあゝ。眠い。もう少し寝かせてよあゝ。

携帯の着信音で私は起こされてしまった。誰だか知らないが絶対に怒ってやる！

「よ…ようちゃん?!」

今までの不機嫌さが一気に消し飛んでしまった。ようちゃんのことなんだから起こしてくれたのだろう。

「は、はい。」

「よお！起こしちまったか？」

「全然。朝食べてきた所だよ。」

「嘘付くなって。寝声だつてバレバレ。」

さ、流石ようちゃん。だてに幼馴染みやってないな…。

「えへへ。」

「えへへじゃねえよ。眠いんだろ？切ろうか？」

「そ、そんなことないよ。もう、起きる時間だし。」

「そうか。頼んでる歌詞のことなんだけどさ…」

それから20分あまりようちゃんと歌詞のことでお話できた。今日はいい休日になりそうw

「早紀？起きてるの？」

下からお母さんが尋ねる。内のお母さんってとっても料理上手だから3食のご飯が楽しみで。エへへ

「起きたよ。今から降りるね。」

私は素早く着替えを済ませて、リビングへ降りた。

「雑誌来てるわよ。」

小説家を目指す人なら必ず読んでいるという、雑誌「新人」。先月ここに応募したからちよつと楽しみで。

「早く食べてしまいなさいね。」

「わかった。」

ロールパンを口にくわえてモゴモゴしながらパラパラ雑誌をめくると、入選者一覧に辿り着く。

え〜っと…朋美：朋美…。そう、私のペンネームは朋美。応募では本名を出しているけど、入選発表はペンネームなのだ。

残念、入選には無かった。どうせ、他のところで入選しているはずもないので閉じて、食事に専念する。

ルルルル…

電話が鳴った。お母さんは用事で出ているらしく仕方なしに私が取る。

「はい。」

「こちら、×出版の新人を担当している天野と申しますが。」

「はあ…。」

「如月 早紀さんはいらっしゃいますか？」

「私ですが、何か？」

「ご存じだと思いますが、大賞に入選されましたので掲載させていただきます、承諾のご確認の電話を差し上げたのですが…。」

「え？大賞？私が？」

「はい。まだご覧になられてませんでしたか？」

「ちよ、ちよっと待って下さい。」

慌ただしく「新人」をめくった。大賞：大賞：！！！！

確かに、大賞：朋美 となっている！

夢のようで、夢のようでどうしたらいいのかわからずしばらく啞然としてしまった。

「す、すみません…。驚いたのもですからつい…。」

「いえいえ、構いませんよ。では、ご承諾頂きますか？」

「はい。粗雑で申し訳ございませんが、よろしく願います。」

「ありがとうございます。これから執筆・投稿よろしく願います。」

ます。』

嬉しさで、嬉しさで、もうどうしようもなくなっていた。
もし、ようちゃんが電話で起こしてくれなかったら、今頃天野さん
の電話に出れなかっただろう。

その夜私はようちゃんにたっぷりの愛情を込めてメール送った。

” ありがとう ”

地獄のテスト

「遠坂さんコッチ、コッチ。」

山口が気を利かせて遠坂を俺たちの所まで案内した。案の定、その後ろには部長と羽柴それに野次馬どもが付いてきていた。

「小谷、どういう事が説明してくれるかな？」

部長はいつもの傲慢な態度でしゃべり掛けてきた。

「遠坂が俺のバンドで歌いたいつて言うからちよつとテストしてみようと思つて。」

「おかしいねえ。遠坂さん、軽音部に入つてさえないのに…。もしかして小谷、お前が頼んだんじゃないの？」

ウチのバンドに来てくれ！アイツの所なんかに行かせないぞ！つていうのがバレバレだ。俺は都合良くその話に乗つかることにした。

「俺は頼んでいま…」

「私が言いだしたんです。」

よ、余計なことを！！

「遠坂さん、コイツに一体どんな弱みを握られているか知らないけど、この機会だ。僕たちのバンドに来ないかい？普段お互い見知っているから、すぐに合うと思つよ。」

横から羽柴が出てきた。おおナイス羽柴。

「羽柴さん、すいませんが小谷君のところが先約なので…。それにどうも、ループ×ループの曲風と合わないみたいなんです。」

だんだん尻すばみになっていつて「私嫌いだし。」つていうのを俺はかろうじて聞き取れた。

芸能界でもすんげえ嫌われてるんだな、俺同情したよ。

「仕方ないですね。それじゃ、さつさと初めて貰えませんか？私たちの練習の邪魔になるんで。」

そついうと羽柴はギャラリーにとけ込んでいった。言うだけ言うておいて逃げやがった。

「陽介、んじゃ文化祭で歌う予定のサンシャインで行くか。」
「だな。それじゃ、俺が弾きながら1回歌うから、歌詞見ながらで
もいいんで後から歌ってみて。」

俺と隆史は目で合図して、少しもずれずに同時に演奏し始めた。
その時点で周囲の驚く目。もちろん遠坂も。

ズンズン、隆史のドラムが印象的なパートで俺は唐突に歌い出す。

煌めく太陽

立ち上る陽炎

そう夏真っ盛り

気温が高くて

暑苦しいけど 息苦しいけど

行こうぜ 夏祭り

The summer festival

夜空に輝く花火

太陽のごとく光 照らす

哀愁漂わせる僕らを一掃する

夏の風物詩

恋人達の物語

全てはこの時のために…

輝くファンタジスタ

夢のような夏を超えて また一つ思い出を創るんだ

未来に続く夏物語り

また来年も創れるかな？

叶わない儚い恋も

叶わない儚い夢も

叶わない儚い明日も

ボクらが変えて行くよ

その思いでは永遠の詩となり 少年達の記憶に
刻まれる

永遠に

またこの場所できつと会おう

歌い終わると万雷の拍手。まだまだ試作段階なのにこんなに受ける
ってこいつらの感受性を疑ってしまう。隆史は得意そうに笑っている。
ま、試作とはいえ拍手を貰えたら嬉しいけどな。

「それじゃ、歌ってみて。」

俺は遠坂に手書きの歌詞を渡して隆史と弾き始める。
今度は目も合わさずに。

ズンズン

少し遅れて遠坂が歌い始める。ボロみつけw

俺は自然と細く微笑んでいた。おっと、真面目に講評しよう。

遠坂の声はまずまず。音程も所々怪しいところがあったけど、周りの
連中は気付いていない。音程で攻めるのは難しいだろうな。

歌い終わると俺たちよりも拍手が凄まじかった。ギャラリーにはタ
ダで生聞けて良かったってうれし泣きしてる奴もいる。大したこと
ないだろうに。

「やっぱ、合わないな。」

俺は拍手が鳴りやまないうちにボソツと告げた。

「音程合っていないところがあまりにも多すぎる。」

「僕はあなたの所に入って欲しくはないのですが、音楽をやっている者として言わせて頂きます。完璧に合っていたと思いますが？」

羽柴の奴がしゃしゃり出てきやがった。予想はしてたがな。

「一般論だろ？俺も隆史も主旋律の音程、楽器で鳴らしてたんだぜ？それを聞き分けることも出来ない結果、音程が外れるっていうことになったんじゃないか？」

「そんなの、聞こえませんでしたけど…。」

「強調して弾いてやる、良く聞いておけ。」

俺は隆史に目で合図して他の音を下げ、主旋律のメロディーをギヤラリーの奴らにも聞こえるように弾いてやった。

「さっきと同じだろ？」

「はい…、そのような音が入っていました…。」

ループの羽柴が折れて誰も反論する者はいなかった。

「と、いうわけだ。残念だが、諦めてくれ。」

「いや…です…。」

「嫌って言われても…、合わなかったんだからしょうがないだろ。」

「来週、もう一度チャンスをください。今度は必ず歌えるようになりますから。」

熱心な眼差しで言われたらさすがの俺も断りきれず…

「来週がラストチャンスだ。もうすぐ別の曲出来る予定だからそれをテスト材料にする。」

俺は帰る用意をしていたので、荷物を持ち帰り際遠坂にそつと耳打ちした。

「明日、俺の所へ来い。」

突然の告白

昨日のことは瞬く間に学校中に広がっていた。

朝、下駄箱に大量の画鋌が入っていたり、机の中に黒い紙が入れられたりした。どうやら、昨日の報復のつもりらしい。

「遠坂いびるからだろ？」

「小学生がやるようなことをして何が楽しいんだか…。」

俺はこんな事位しかできない、周りの男どもにほとほと呆れていた。

「まあまあ、昨日は相当なショックで仕事も休んだらしいぜ。面目丸つぶれだな。」

「興味ないな。で、お前は大丈夫なのかよ。」

「周りの女子が止めてくれたらしい。こういう時は感謝感激だな。」
「ちゃんと聞こえたぞ。」普段はウザイけど。「っていうのを

「隆史らしい理由だな。お、噂をすればだ。」

遠坂が教室に入って来るなり、まっすぐ俺の所まできた。いきなり昨日のことで話すつもりか？いくら何でもデリカシーなさすぎるぞ。

「その…。私のせいでこんな事になってごめんなさい。」
はい？

「なんであやまんの？」

「だって、私が…私が…。」

「合わないって宣告したのは俺だよ。遠坂がやれっていったんじゃ無いんでしょ？だったら誤る必要ないじゃん。」

「でも…でも…。」

「あゝ俺そういうの嫌いなんだ。さっさと戻れよ。」

俺はいらついてきて思ったことをいっちまった。

遠坂は黙ってうつむいたまま席に戻った。

「お前…、今のはひどくないか？」

そつと隆史が言ってきた。

「言い過ぎたと思うけど…。正直なところ迷惑じゃん。」

「はあ。分かってやれよ。」

隆史は呆れた様子で、俺を見つめる。分かってやれってアイツのどこをどう分かって言うんだよ。

「無理無理。そんなことより、さっさと歌詞つくっちまおうぜ。」

俺は多少の後ろめたさを感じながら、それを振り払うかのように歌詞作りに没頭した。

普段より、授業が長く感じた。遠坂のことが頭から離れられなかったんだろう。

放課後、誰もいなくなつたのを見計らって俺は遠坂に声を掛けた。

「よお。」

遠坂は俺をみるとうつむいた。

「なんで、あんなにひどく言われたのにバンドに入ろうとするんだ？普通なら逆ギレして出ていっちまうぜ。」

「……。」

「だんまりか……。」

「……だから。」

「え？はつきり言えよ。」

「好きだから。」

「は???」

「好きだから!!!私は小谷君が好きだから!!!」

突然の告白にさすがの俺も動揺を隠しきれなかった。

「な……なんで？」

「傘貸してくれたとき嬉しかったから、返したいと思って学校を探したの。」

「それであんな中途半端な時期に転校してきたのか……。」

遠坂は黙ってうなずいた。

「俺はてつきり頭の方が……。」

「バカ!」

遠坂は持っていた鞆で殴ってきた。

思わず笑みがこぼれる。

「あ…笑った。」

幸せそうに笑いながら言われて俺はどう、対応するか分からなかった。

「笑っちゃ…悪い…かよ。」

赤面を見られないようにそっぽを向く。

「だって初めて笑ってくれたもん。普段は、齊藤君か如月さんと一緒じゃないと笑わないのに。」

「見てたのか…。」

「うん。転校してきてずっと…ずっと…。」

「……。」

「……。」

「いつからだ？」

「え？」

「俺のことそういう風に思うようになったのはいつからだ？」

「軽音部で楽器を弾いてた頃から。」

という和一週間とちよつと前か…。

「格好良かった…。初めてだった…。胸のドキドキが止まらなくて…。初めは私、何かの病気じゃないかって思ってた。気付いたら小谷君のことが好きになってて。」

「それでバンドに入りたいって言ったのか。」

「うん…。直接言うような形になっちゃったけど、気付いて欲しくて…。初めは人数不足してるみたいだし、私…その…アイドルだからすぐに入れてくれて貰えると思ってたんだけど…。」

「俺は本当に入って欲しくなかった。嫌だったんだ。部長の目も、羽柴の目も、周りの目も。ただでさえ隆史の奴が女子にモテてみんなからの視線にさらされて。そのうえお前まで来るって言い出すんだからどうすりゃ、いいんだって。」

「でも実際私、自分に自信ありすぎてたように思う。自分のレベルの低さに驚いて、小谷君達のレベルの高さに驚いて。ますます惚れ

ちゃって。」

恥ずかしそうにうつむく遠坂。

「そっか…。お前の気持ちは分かったよ。俺は遠坂と付き合えないし、誰とも付き合うつもりはない。それに一緒に歌うつもりもない。」

「どうして…。私のドコがダメなの？絶対直すから!!」

「遠坂の問題じゃなくて俺の問題なんだよ…。気持ちは嬉しいけどさ。」

つい、西城のこと思い出してしまう。昔の辛い過去…。もう二度とそんな重いはしたくない。

「…らめない。諦めないから！小谷君の問題も抱えられるようになるから!」

俺は哀れな目で遠坂をみた。

「いつかそんな日がきたらいいな…。」

仲直り

翌朝、俺は普段通り憂鬱な気分で学校に登校した。

未だに遠坂の言葉が耳から離れない。

「よお！つてお前すげえ顔だな。」

「うるせえ、元からだよ。」

隆史に付き合う気力もなく、そのまま席で沈没してしまった。

「遠坂に何言われたんだ？」

「お前には関係ないだろ。」

ふう〜と隆史は大きなため息をついて、俺のそばから離れていった。

思い出したくない、封印したはずの過去がよみがえる。鮮明に、昨日よりも鮮明に。

同じ思いを味わうのか…。辛い辛いあの思いを…。

もうたくさんだ。俺の事を勝手に好きになって…

俺の気持ちも考えずに、そんなに俺を苦しめたいのか！！

俺はみんなに悟られないようにひとり涙した。

俺を揺り動かす小さな手。

ドコか小さいとき同じ事をされていなかったっけ？

淡い幼稚園の頃の記憶…そうだ、思い出した。

あのとき、閉じこめられて出られなくなって、一人で泣いていたときだ。

ふいに暗闇から手が伸びてきて、俺を揺り動かしたんだ。

この感覚は…

「さっちゃん？」

「あwwおはよう。」

いつの間に寝ていたんだろう。もう、授業が終わっていて、誰もいない教室に如月と俺の2人つきり。

「なんでこんな所にいるんだよ。」

「ようちゃんが心配になって。でも、ビックリしたよ。いきなりさっちゃんって言うんだから。」

「う…うるさい。忘れる。」

俺は恥ずかしさの余り赤面してしまった。

「アハハ。ようちゃん昔っから何一つ変わってないね。私には何考えてるか分かるよ。」

「当ててみるよ。」

「西城さんのこと考えてたんでしょ？」

「う…。」

どうしてコイツは人の気にしてる過去を…って言うか何で分かるんだ？

「何で分かるんだ？って思ってるんでしょ。分かるよ…。ずっと見てきたから。」

「ずっと？」

「うん。ずっとw」

突然教室のドアが開いて、隆史と遠坂が入ってきた。

「遠坂には西城のことを話した。」

「そうか…。」

「ごめんね…。本当にごめんね…。私、何もしらなくて…。ただ、小谷君だけを見ていたくて…。」

「もういいさ。」

「でも…、でも…。」

「しつこい。」

「ごめん…。」

気まずい沈黙が流れた。俺は遠坂のこういう所が嫌いだ。全部自分で背負い込もうとする。

「さて、陽介も起きたところだし帰るか。」

「うん。そうしよ。ようちやん起きて！遠坂さんも一緒に帰ろう。」
俺たちはそれぞれの思いを胸に抱きしめながら明日に向かって歩き始めた。

バンド名決定

遠坂とのわだかまりも無くなり、俺は初々しい気分で作詞に取りかかった。

今日は何かと思いつく。といっても俺の両隣を独占する遠坂と如月のお陰なのだけど……。密着しすぎ（；＾ー＾）

「今思ったんですけど、このバンドの名前聞いて無くて……」

「え……名前……名前……名前ねえ。おい、隆史！このバンド名ってなんだっけ？」

「あ？そりゃ……その……アレに決まってんじゃないか！」

「アレって？」

「……」

「……」

「もしかして決まってるんじゃないのじゃ……」

そうです、その通りです。活動するとは思ってなかったので決めていませんでした。どうしましょ、どうしましょ

「じゃ、今から決めようよ。私、山口さん呼んでくるね。」

如月は慌ただしく教室を出て行った。

「そうだな……。バンド名って言われても……、歌詞もロクに思いつかない阿呆2匹に言われてもなあ。」

「阿呆はお前一人で充分だ……」

「つち、俺まで阿呆扱いしやがる。」

俺たちのやりとりを見ておもしろかったのか、遠坂は笑い転げている。

「お前も笑いすぎだ……」

「だって……あはは……ダメ……もう……ヒーヒー」

だから笑いすぎだって。

「お待たせ」

如月は整備中だったと思われる山口の手を引っ張って来た。山口の

手には工具が握られている。

「何よ？いきなり。」

「エヘヘ。これからようちゃん達のバンド名を決めるから山口さんも呼んできたのだ。」

「はあ？なんであたしが…。」

「だって山口さんようちゃん達の専属アシスタントなのでしょう？立派なメンバーじゃん。」

「まあ、そうだけどさ…。小谷くんとかあたしがメンバーだって認めてくれているワケじゃないのだよ。」

「ええ…。そうなのようちゃん？」

う…、そんなに目をキラキラさせてコツチみるんじゃない…。俺はその攻撃に弱いのだ。

「隆史…。」

「え…イヤ…その…。陽介、お前が決める。」

「え…。如月が言うならそうなのだろ…。」
負けた…。

「ほらね。私は作詞して、遠坂さんが歌うの。」

「ってオイ。遠坂は認めてねえぞ。」

「ダメ？」

またあの瞳キラキラ攻撃…。負けんぞ！！俺は負けんぞおお！！

「ダ…メ…。」

「ええ?!」

遠坂まで…。うう苦しい…。男として…。

「その通りです…。」

負けた…。

「ほらね。ようちゃん話せば分かってくれるのだよ。」

俺が唯一弱いのが如月ってことがバレってしまった。遠坂と山口の邪悪な笑みが俺には見える…。

怖い…。

「アリスなんかどう？」

山口の提案。

「却下。どこぞのギター二人組のバンド名とマネする奴がいるのだよ。しかも、時代古いし。却下、却下。」

ブーたれる前に完全否定しておく。

「え、せつかく考えたのに…。齊藤君はどう思う？」

「ん？陽介に任せろ。」

んな！無責任な！！

「じゃあ、サタン！！」

「悪魔かい！！」

ガラにもなく思わず突っ込んでしまった俺。なにはしゃいでんだ。見苦しいぞ。

「アハハ。突っ込まれたw」

如月さんの無邪気な笑顔は無敵です…。

「遠坂はなんかアイデアないの？一応、ボーカルだんだし…。」

「ん…。今度の新曲でボツになったタイトルなだけど…EDENってどうかな？」

「EDENかあ…。」

俺は少し言葉の響きが良いだったので候補にしておくことにした。

「EDENってたしか永遠の楽園って意味だったよね。」

無責任な隆史が唐突に横やりをさす。

「齊藤君よく知っているね。」

うわw如月の笑顔で照れて屋がる。

その後さんざん話し合った結果、バンド名は遠坂の「EDEN」に決まった。

「それともう一つ…。小谷君のメルアド教えて！！」

ははあ、これが目的で今日遅くまで残ったのだな。

「ヤダ。」

「いいよ 赤外線どうぞ。」

ってオイオイオイオイ！！如月なに勝手に俺のメルアド教えて

んだよ。

「待て待て待て待て！！人のメルアドを勝手に教えてもイイって習ったか？」

「ほえ？もう、送っちゃったよ。」

「次あたし〜。」

「はいは〜い。」

は〜言っているしりから……。疲れる……。

「後で隆史のメルアドも一斉送信しとくからな。」

「え、ちよつとそれはひどいのじゃ……。」

「問答無用！！」

俺はさっそく遠坂と山口の返信に隆史のメルアドを載つけて送信した。

全国大会？

春も終わり、夏の色が見え始めていた。

お決まりのメンバーでダラダラしていたそんな日、山口の奴が大あわてで教室に入ってきた。

「何あわててんだよ。」

「えっと…ハアハア…あの…ハアハア…あの…。」

「まずは落ち着いてから、ね？」

隆史の悩殺スマイル。そういえば「悩殺」って死語だったな。

「落ち着いたみたいだな。何だよ？」

「全国大会があるって知ってた？」

「は？全国大会？」

「うん。優勝すればレコーディングして貰えるの。全国のミュージシャン目指す高校生が集まる、夏の一大イベントなんだよ。」

「へえ、興味ねえ。俺はパス。」

「面倒くさいから俺もパス。」

「私仕事で…パス。」

「言うと思った…。でもね、中杉先生がこのメンツなら必ず優勝できる！部費稼げる！って勝手に応募しちゃったみたいなの。」

「はああ？マジでいつてんの？」

「マジ、マジ。だからあんなに慌てたのよ。」

俺の頭の片隅で何かが切れるような音がした。

「ちよっと、中杉のところ行ってくる。」

俺の状況を察知した隆史と如月は必死になって俺を止めようとした。

「待て、落ち着くんだ。」

「ようちゃん待って！！早まらないで！」

状況が良く理解出来ない二人は啞然として見つめている。

「これ以上先にいくって言うなら俺はお前をぶっ殺す！！」

「ちようどいい。…死ね。」

あゝ、なんと言えば良いんだろう。うん、取りあえず俺の気は収まった。

でも少々暴れちゃって、隆史が失神しちゃった　テヘツ

「ようちゃん…やりすぎ。」

う…、小学校以来だ。如月のデコピンの威力は未だに衰えず…。俺の意識はだんだん薄くなって行く。

あゝ、花園がみえる

「…きて！起きて！」

激しく体を揺すぶられ、俺は意識を取り戻した。

失神してからあまり時間が経ってないようだ。小学校の時と同じだな。

「てて…。」

「男の子なんだからあの位で、泣かない。」

いや、あの位って…。失神するほどのデコピン放っというセリフか？

「小谷君大丈夫？」

「やっぱ如月…怖い…。」

「私も思った。」

遠坂は俺に激しく同情してくれているらしく、やや赤い額に濡れたハンカチを置いてくれたいた。

一方俺に張り飛ばされた隆史というと…、山口に介抱されていても未だ起きず。

「いつまで寝てんだ。起きろ。」

俺はいつものように脇腹を一蹴りした。

「うげ。もっと丁寧に起こせよ。ま…、お前にはり倒されたのは久

しぶりだな。」

「ほつとけ。で、全国大会とやらには絶対にでなくちゃなんのか？」

「うん…。校長先生も乗り気でPTAの方々にも応援を要請するつて。」

「はあ…。遠坂か…。」

「うん…。」

「ごめんね。本当にごめんね。わがまま言わずに私がバンドに入らなければこんな事にならなかったのに…。」

「もういい。仕方ないだろ。日取りは？」

「今週の日曜日が予選。」

「は？応募いつだったの？」

「一ヶ月前。」

えくつとするとあの中杉はずくつと黙っていたわけだ。コルス！

「やっぱり中杉叩きのめす！」

「ダメだって!!」

鈍器で殴られたような衝撃が頭に走り…。本日2回目の失神。

曲決め

急遽、文化祭用の曲を破棄し（2時間掛けて創ったのに…）新しい曲を作ることに。

「歌詞書いてきたよ。曲の方はようちゃん達が上手く創ってね。」

「曲ぐらいなら30分もあれば出来る。後はボーカルがどんなけ付いてくれるかな。」

「頑張ります…。」

如月が書いてきた新曲はこんな感じだ。

レクイエム

灰色の空 今日雨は降りそうだな

傘はあるにはあるんだけど

たまには雨に濡れるのも良いんじゃないかな？

雨降りの日は何時になく静かで

世界が止まったようで

悲しくなる だけど

その先の向こうに

君たちが待っている

行こう！恐れずに

ひたすら前に進め

君たちが待っているのなら

何を恐れるんだ！

グロリアス

世界は繋がって 丸い球体で

どこかが不完全なら

たちまち崩壊してしまう

グローリアス

みんな同じで 何一つ違わない

人種 国籍 民族 国家

それが何だって言うんだ？

一人が雨で泣いていたら

みんなが手を差し伸べる

近い未来 そんな世界がくるといいねw

「こんな重い歌…。私で歌いきれるかな？」

確かにこの歌詞が行っていることは凄く重い。

「大丈夫だよ。レクイエム、鎮魂歌ってなってるけど、実はようちやんと遠坂さんの出会いを元に書いてみたんだ。」

照れくさそうに如月は笑う。

「ホントだ…。ライブの後雨で困ってたときに小谷君が傘貸してくれたっけ。」

灰色の空 今日雨は降りそうだな

「ま、俺は…西城が傘買ってきてくれたから、必要なかったわけで…。」

傘はあるにはあるんだけど

たまには雨に濡れるのも良いんじゃないかな？

「もしかして君たちって私たちのこと？」

「大正解。さすがだね山口さん。」

雨降りの日は何時になく静かで
世界が止まったようで
悲しくなる だけど
その先の向こうに
君たちが待っている

「これなら問題なく曲付けできそうだ。陽介、早速やるか。」

行こう！恐れずに
ひたすら前に進め
君たちが待っているのなら
何を恐れるんだ！

「国籍って？」

「ああそれはね。今私が書いてる小説についてなんだ。」

グローリアス

世界は繋がって 丸い球体で
ドコかが不完全なら

たちまち崩壊してしまう

グローリアス

みんな同じで 何一つ違うない

人種 国籍 民族 国家

それが何だって言うんだ？

一人が雨で泣いていたら
みんなが手を差し伸べる

近い未来 そんな世界がくるといいねw

「如月さんらしいね。なんだかスッキリした。何とか歌えそう。」

「良かった。練習頑張つてね!!」
運命の全国大会まであと4日。遠坂がその間どのくらい化けるかが心配だ。

猛練習（前書き）

すいません。かなり短いです。

猛練習

それから三日間というものの、俺たちは放課後をフルに使って練習をした。

ボーカル・エレキ・ドラムっていうなんだか味気ないバンドだけど、それをカバー出来るだけの歌唱力と演奏力を備わっているから、まずまず予選落ちはないだろう。

いざ、明日って言われてもなんだかやる気が出ない俺。

「また休んでる！明日だよ。」

「もーちよつと。ってか面倒くさい、山口、口うるさい。」

「学校中の期待がかかってるって言うのにどうして小谷くんはやる気がないのかな！」

ウへ。ホント口うるさいわ。たまったもんじゃない。こうなったらコッソリと帰ってやろう。

「ようちゃん今、コッソリと帰ってやるって思ったでしょ。」

う…、鋭い、さすが如月。

「イヤ、ソナナコトアリマセンヨ。」

久々の棒読み。俺ってこんなキャラだっけ？

「ちゃんと練習しないと…。お持ち帰りさせないよ…。」

って何あんた爆弾発言してるんだ！！仮にもトップアイドルだろうが。

「隆史、変なこと吹き込むな。」

「なんで分かったの？」

「お前ぐらいいしか吹き込むような奴、いないだろ。」

「あ、確かに！」

なに納得してんだよ。ほんつと疲れる…。

「ダラダラしてないで、ほら。」

なんだかなあ…。如月の奴最近俺に世話焼きすぎてないか？

「しんどい…。」

「まだ5月じゃん。ようちゃんが本気で倒れるのは8月辺りでしょ？」

「小谷君って夏に弱いのか？」

「うん。熱かったりすると干物になっちゃう。」

「可愛い」

遠坂…、可愛くないし。本人は生死の境を彷徨ってるんだぞ。

「ちゃんと練習したらアイス買ってあげるから。」

「アイスなんてガキじゃあるまいし…。」

「だって、ようちゃん、小学校の頃…。」

「はいはいはいはい。小学校の頃のくだらない思い出なんて放っておいてさっさと練習しようぜ！予選明日なんだろ？おい、隆史何寝てんだよ。起きろ、練習するぞ。遠坂もジュース飲んでないでさっさとマイクの前に立つ。山口、ボーっとしてないで機器のメンテしろよ。如月は評価任せた…！」

ふう〜危ない、危ない。やっぱ如月は恐ろしい…。

みんなはなにやらクスクス笑ってスタンバイし始めた。

いくら5月だからといっても今年は熱い、日差しがきつい。

「じゃあ、最初から1・2・3」

その後、中杉が来るまで練習を続けた。

予選・挑戦状

ついに予選の日、正直言つて真面目にやるきはない。適当にサラつと流して予選落ち。これが俺が描いた理想の形だ。

が、俺と隆史以外の奴はやけに燃えてやがる。必勝ハチマキまでしてるし…。

「ようちゃん、今日はなんとしてもトップで勝たなくちゃならないのよ。」

え……天然キャラの如月さんですか？

「小谷君。いくつか予備のギター持ってきてるから存分にいっちゃって!!」

そうそう壊れないと思うんですが……。

「小谷君。私に赤っ恥をかかせないでよ。かかせたら結婚して貰うからね。」

あなたが一番しつかりしないといけないんでしょが……。でも、結婚はヤダな。

「はいはい、全力でやらせていただきます。」

「ハイは一回！」

「はい。」

うひゃあーこええー。

「今日はビッグゲストも来てるから、頑張ろうぜ。」

隆史の奴、
一体誰を呼んだんだ。

「誰だ？」

「秘密。」

コ・コノヤロウ…（怒）

「そこ！リハやるわよ。」

如月さん怖いです。ハイ。

「一回で全部決まるのよ。それに待機室は2組前からじゃないと使えないからね。」

「だからって、こんな朝っぱらから。」

大会は9時、今は7時orz

「実質1時間30分よ。無駄にしたら承知しないからね。」

俺たちは有無を言わせて貰えずに練習させられた。本番前に演奏させるって鬼…。

1時間45分後。俺たち（男子陣）はヘトヘトになっていた。

「この位で疲れてどうするの？」

ひえゝ、それ以上いじめないで。ママ…

「取りあえず受付を済ませましょう。」

山口が率先して行く。さすがにアシスタントだけあってこういうときに頼りになる。

開場は厚生年金会館。遠坂と西城の思い出がある場所だ。すでにほとんどの受付が終わっており、名簿には名一杯の印がついてあった。

「泉ヶ丘高校の方ですね。89番になります。」

受付の姉さんから番号札を貰い、空いている席に腰を下ろした。

「陽介、緊張してるのか？」

「は？なんで？」

「妙に口数が少ないぞ、お前。」

「いや、こんな面倒なことになるなんてな。」

なんて他愛もないことを隆史としゃべっていたら、いつの間にか男子どもに囲まれていた。

「もしかして、遠坂エミさんですか？」

あゝ、遠坂のファンか。納得。

「そうですけど…、なにか？」

いやいや、どう見たってこいつら下心見え見えだろ。なに知らないフリしてんだ。

「俺たち、遠坂さんのファンで、その…サイン頂けますか？」

「俺は一緒に写真取って下さい。」

「握手して下さい。」

あゝもゝわらわらと（怒

俺はこういうのが大っ嫌いだから、男どもの包囲網をぐぐり抜けてロビーに行くことにした。気持ちを落ち着けるために自販機缶コーヒーを買おうとしたら、また変なのがコッチに近づいてきた。

「君って確か遠坂と一緒にいたよね。」

いかにも不良ですっていつてゐるような姿をしてる男。ケン力弱そう……。

「そうだけど。」

「君たち泉ヶ丘高校って毎年この大会出ても下の方でしょ？だから遠坂雇ったの？」

なんなんだコイツは？

「アイツが勝手に入ってきただけ。そんな仕事だしても、アイツ来ないでしょ？」

「でも、中途半端に転校したって聞くよ。あ、校長が勝手に雇ったのか……。そっかそっか、ごめんね。気付かなくてさ。」

「あんた名前は？」

「ああ、富竹とみたけ 裕太ゆうた。よろしくね。」

満面の笑みで握手を求めてきやがる。コイツそんなに殺して欲しいのか……

「僕を殴りたいって顔してるね。でも、今ココで問題を起こすのはまずいんじゃないかな？」

コ・コイツ……。いつか必ず殺してやる。

「泉ヶ丘に遠坂がいても、所詮伴奏が伴奏だからね。僕ら名城の敵じゃないね。おっと、時間だから行くよ。」

不良スタイルに身を包んだ富竹はその場をさっていった。

アイツ……名城とかいったな。フッフ、おもしろい。完膚無きままに打ち滅ぼしてやる。フッフフ、ハッハッハッハ。

俺は、名城の富竹のバンドを打ち倒すと決心した。

決起

俺がメンバーの所に戻ったときには、すでに遠坂ファンは少なくなっていた。

「陽介…。どうしたんだ、そんなに殺気を放って。」

「コロス…。」

「え？誰を？」

「名城の富竹。」

「なんで？」

俺はメンバーに先ほどのいきさつを話した。

「なによそれ。わざわざ遠坂さんがこの大会のために雇われたみたいじゃない。」

山口さん？話聞いてました？そういったんですよ、富竹は。

「私…小谷くんに会いに來ただけなのに…。」

「俺は、あの名城の富竹には負けたくない。なんとしてでもアイツより上にいく。」

「でも、名城ってこの大会の優勝候補だよ。」

「如月、ココは相手がどんな奴かなんて関係ない。売られたケンカは買ってやる。」

「そうだぞ。この借りはキツチり返させてもらうからな。」

隆史の奴が珍しく不適に笑う。

「絶対優勝しようね。」

山口は気合いを入れて機器のメンテに入った。

予選が始まったが、他の奴らなんて関係ない。俺たちの倒す敵はただ一組。名城のみ！

「そろそろ、楽屋にいきましょう。」

遠坂が言う。もう、そんな時間か。

俺たちはこれから前線へ出る、兵士のような心情だった。これはた

だの勝負ではない、戦争だ！楽器を武器に、己の声を信じ、闘志を歌詞にのせ審査員の分からず屋どもに叩き付ける。

「エントリーナンバー89番、泉ヶ丘高校のEDENの皆さんです！」

司会者が場の空気を盛り上げる。遠坂がいるということで注目度ナンバー1のこのバンドについてスポットライトが当てられたのだ。
「オリジナル曲レクイエム、どうぞ！」

俺は静かに、武器を掲げ弾き始めた。
繊細に細やかに。

そして隆史のドラムが入る。嵐のような怒濤の演奏は上手くギターと混ざり合い、会場を支配する。

俺も隆史に負けじと荒々しく弾き初め、お互いが絶頂に達したとき、遠坂が歌い始めた。

おし、タイミングばっちり！！

灰色の空 今日雨は降りそうだな

傘はあるにはあるんだけど

たまには雨に濡れるのも良いんじゃないかな？

雨降りの日は何時になく静かで

世界が止まったようで

悲しくなる だけど

その先の向こうに

君たちが待っている

行こう！恐れずに

ひたすら前に進め

君たちが待っているのなら

何を恐れるんだ！

グローリアス

世界は繋がって 丸い球体で
ドコかが不完全なら

たちまち崩壊してしまう

グローリアス

みんな同じで 何一つ違わない

人種 国籍 民族 国家

それが何だって言うんだ？

一人が雨で泣いていたら

みんなが手を差し伸べる

近い未来 そんな世界がくるといいね w

短い歌詞を出来るだけ違和感を与えずに長く歌う方法を俺たちで編み出した。

中杉に無理矢理出場させられる事になったとはいえ、遅くまでみんなと練習した姿が、不謹慎ながらも目に浮かぶ。

弦で指を切ったとき、如月が手当してくたっけ。

弾きすぎてチューニングが狂ったときに山口が、調整してくれたよな。

弾きすぎて息切れしてる俺らに遠坂がジュースを買ってきてくれたり。

今までの思いを全てこの瞬間にかけ、ラストに入る。

会場の緊張は最大に。

ここで、いままで激しかった演奏を俺たちはやめた。

そして怒濤の拍手。ちらつと富竹を探すと悔しそうに唇を噛んでやる。へ、ざまーみる。

退場しても拍手がしばらく鳴りやまなかった。予選は俺たちの優勝で決まりだな。そう、確信して座席へと戻った。

表彰式（前書き）

短くてすみません…

表彰式

俺たちの後、ほとんどの組は迫力に欠けていた。

それは会場中が一致していたようで、まさしく聞く耳持たず。

順調に進み時は4時。ほとんど、感想を述べに来た遠坂ファンの対応に追われ、退屈せずにすんだ。まあ…その分イライラも溜まったけど。

「それでは結果発表です。全国大会に出場出来るのは上位3組のみ、それでは発表します第10位から…」

司会の奴が言葉巧みに会場を盛り上げて行く。順位が上がるにつれて、緊張も高まる。

「さて…、いよいよ第3位の発表です。第三位、私立法政学院高校！」

右横の座席から歓声があがる。会場からはまばらな拍手。どうやら発表されて全国には行けなくなった組の奴らみたいだ。

「続きまして第2位！県立名城高校！」

おっと、確か優勝候補だったっけ…。予想していたみたいで今回は余り拍手はなかった。

「第1位の発表は審査員長の柳田先生に講評を交え、発表して頂きます。」

「ご紹介に預かりました、柳田です。私は14年間この予選を審査員として見て参りました。どの年も白熱した演奏と思い思いの歌を聴かせて頂きました。しかし、今年は例年に比べて類を見ない斬新なバンドが現れました。会場を一瞬の内に支配してしまう圧倒的な演奏力。そして、それに負けないような素晴らしい声。激しい伴奏に相反するような歌詞にも関わらず、なんの違和感もなかった。恐らく全国大会ではもっともっと素晴らしい歌を聴かせてくれるでしょう。それでは第1位の発表です。市立泉ヶ丘高校！！」

会場からは耳をつんざく程の拍手。まあ、予想していたとはいえこの高揚感はたまらない。一種の薬のようだ。

「第3位からの方はステージにお越しく下さい。」

司会は拍手に負けじと声を張り上げる。俺たちは尚も拍手を送り続ける人垣をなんとか突破し、ステージに上がった。如月と山口は席で待っていると譲らなかつた。

「おめでとうございます。これが全国大会の参加証です。」

司会から渡されたのは封筒。中に参加証という物が入っているのだろう。なんかあつけない表彰式だなと、拍子抜けしてしまっている俺がいた。

表彰式の後、俺たちは楽器を担いで会場を出ようとしたら富竹の奴が声を掛けてきた。

「さつきはすまなかつたね。君たちの実力がこれほどとは…。」

ドコまでも嫌みな奴なんだよ。自分の演奏能力を過大評価してやがる。ま、俺も人のことは言えないんだけどな。口に出して言わない点がコイツとの明らかな違いか。

「全国大会も楽しみにしているよ。予選より遙かにレベルが上がるけど、君たちなら優勝できるかもね。それじゃ。」

相変わらずの不良スタイルはそのまま仲間の所へと去っていった。

「陽介、あれが富竹か？」

「そうだ。」

「案外憎めない奴だな。」

「俺も思った。」

「ちょっと自分たちに自信持ちすぎてただけなのかもね。」

「遠坂さん、でもアイツ私たちにケンカ売ってきたのよ。」

「そう、カリカリするなって。勝ったんだから。」

「でも…。」

ブツブツ文句をいう山口を後に俺たちは厚生年金会館を後にした。

学園アイドル？

今朝はやけに通行人の視線を感じる。

寝癖がひどいのか？髪を触ってみるが特に異常はない。それとも顔に？！ケイタイを使って顔を確認する。これも普段通り、異常なし。も、もしかして窓空いてたり？？？！！急いで公園のトイレに入って確認するがこれも異常なし。

一体なんだって言うんだ！！朝っぱらからイライラして、今日は最悪の一日になりそうだ。

学校に近付くにつれ、だんだんと視線が強くなる。そして、校門の前には報道陣。どうやら、制服で学校関係者だと思われ視線を送られたという結論に辿り着いた。

報道陣に気付かれないように校門を潜ろうとしたら、一人の女性リポーターに捕まってしまった。

「あなた、小谷君ね？昨日の予選はどうだった？」

はい？！なんであんなが予選のこと知ってるんだ？

「すいません、学校が始まるんで失礼します。」

しつこくネチネチと質問を投げかけてくるリポーターを無視して、教室に向かった。

「隆史！どういう事なんだ？」

教室に入るなり隆史に詰問する。

「お前新聞見てないの？一面トップだったんだぜ。」

「はあ？」

「昨日の予選で高校生とは思えない程の腕前とかでかなり大げさに書き上げられてた。」

「はあ。なんでこうなるんだよ。」

「しばらくはマスコミから追っかけられるだろうな。俺も朝、校門でしつこく付きまとわれたし。俺らよりも、遠坂の方が大変だと思うけどな。一応トップアイドルだし。」

そうかあ…。遠坂にも魔の手が伸びるのか。

噂をすればって奴、ヨレヨレの遠坂が教室に入ってきた。

「お、おはよ〜。」

「お、おう。大丈夫だったか？」

「もう無理。死んじゃう。」

そう言うなり遠坂は俺の机に抱きつくように倒れ込んだ。

「小谷君の臭いがする〜。」

壊れた?!

「お前ってそういうキャラだっけ？」

隆史が驚愕の眼差しを向ける。クラスの男子陣も俺を睨み付けてくる。

「どけって。邪魔、邪魔。」

俺は邪険に遠坂を引きはがし、彼女の本来の場所へ強制送還する。つたく、やってらんねえよ。

「ホームルーム始めるぞ。」

久しぶりの篠山が入ってくるなり、ニタニタ笑い出した。キモイ。

キモすぎる…。吐き気がしてきた…。

「みんなも知っているとおり、我が学園のアイドル遠坂さんとその取り巻きの活躍によって…」

ちよい待て、俺らは取り巻きかよ?!

「…よって我が校の知名度は急上昇すると共にニュースでも報道されるほどだ。マスコミも黙っちゃいないだろうから、クラス一丸となって遠坂さんを守るように。それと取り巻きから情報が漏れないように、取り巻きも気にとめておいてやってくれ。」

コイツ…。ああ〜イライラする!!（怒

「今朝はこんなもんだ。授業の準備しておとなしくしてるように。」
言いたい放題言って、篠山の奴は教室を出て行った。

「小谷君、ギター上手いって噂だったんだけどそんなに凄いな。聴かせてよ。」

う…、俺を包囲するな女子達よ。隆史がいるだろう!…!（絶叫

「今、ギター持ってないから。」

「そつか…、じゃあ今日部室覗きに行ってもイイ？」

上目遣いで言うなああああ……！！！！

「今日は昨日のことがあるから早く帰ろうと思ってるんだけど。」

「じゃ、私たちと一緒に帰ろうよ！」

先ほどまでとは違う女子が親しげに声を掛けてくる。

もう…やめて…（涙

「そんな気分じゃないし…。」

「もしかして、彼女と？」

「俺はフリーだけど。」

「んじゃ、決定！校門で待ってるね。」

勝手に決めないで…。お願い…。

俺が心の内で号泣していたら1時間目の授業が始まった。集中できねえよ。

まさかの西城？

授業終了後、俺は休み時間にコッソリ下駄箱から靴を取り出して（そこには大量のラブレターorz）おいた。

そして、女子達に見つからないように教室が1階であることを利用して窓から抜け出すことに成功した。

ワハハハハ！ざまーみろ。俺様になうはずがねえんだよ。

今日最高の気分で校門にダッシュ。もちろん、玄関辺りで女子達が待ち伏せしているという情報はあらかじめ経験者の隆史から入手してあるので、問題なくスルー。

と、校門付近で男子達を取り巻いている様子。遠坂はまだ、教室のはず…。俺は嫌な予感がした。

「あ、陽介！！」

う…予感的中。西城だし。一応今でも好きなんだけど、あんな別れ方だったからあれから会うのが気まずくて、ずっと避けていた。

「よ、よお。久しぶりだな。」

制服姿の西城はやっぱ可愛いw見てて幸せになる。

「ニユース見たよ！陽介ってやっぱ凄いな。」

「周りがへボかったんだよ。」

俺はドキドキと周りの男子からの殺気がなんとも気まずかった。

「実力だよ」。あゝあ、私も聴きたかったなあゝ。それにエミちゃんいるんでしょ？羨ましすぎ。」

うう…。俺の心に西城の笑顔が…。もうダメ、しぬる…。

「そんなことより、移動しね？周りの視線が…。」

「アハハ。そんなところ中学校から変わってないね！」

そういつて西城は俺の手を掴んで歩き出した。俺のこの心拍数の高さを知っているのだろうか？

「西城も…、あのときから変わってないな。」

「そっかな？でも陽介からメール来なくなってる結構寂しかったよ？」

それって…、いやそんなことないか。なに考えてるんだ俺。

「そうなんだ。でも、俺たち友達だろ？メルアド変えてないんだから西城から送ってくれたら良かったのに…。」

「ん…、なんだか恥ずかしくって。」

ちよっぴり舌をだして赤面する西城。ヤバイ、悩殺される…。

「そつか…。で、今日は何できたの？」

「陽介の激励！かな？」

かな？ってオイオイ。俺はおかしくてクスクス笑ってしまった。

「む…。なにがおかしいんだよぉ。」

笑う俺の頬をぷにつて指でつつく。

「いやいや。そんな理由で来るなんて思ってたからさ。」

未だに笑う俺にすこしご機嫌を損なったようだ。

「もう…！！全国大会、応援に行つてあげないんだから！！」

「え？来てくれるの？」

「あつたりまえじゃん！生で聞けるんだよ！このチャンスを逃すわけにはいかないじゃん！！」

そついや西城は遠坂のファンだっけ…。なに期待してたんだよ俺…。バカみたいじゃん。

「えつとな。確か夏休みだったと思う。詳しいことはメールで送るわ。資料家にあるし。」

「うん。ありがとう。」

くつたいのない笑顔は今の俺にしたら世界最強の兵器だ。胸が苦し…。

「俺、これから寄るところあるから、ココで。」

「そうなんだ…。じゃ、またね！！」

一瞬間が曇ったように思ったのは今の俺の心情のせいだろう。何時も通りの笑顔で返されたんだからな。

「おう、またな！」

やつぱり、西城というのは…、辛い。好きな分だけ辛いんだ。

『今空いてるか？』

俺は隆史に電話した。

『あ…お、おう！どうしたんだ？』

『お前の家行ってももつきりギターが弾きたい。』

『……何かあったのか？』

『聞かないでくれ。』

『分かった。先に行つててくれ。家の方に電話しとくから。』

『悪いな。』

『なにいつてんだよ、今更。じゃあな、後から行くから』

ふう、辛いことがあったら隆史の家に限るな。

一人まだ落ちる気配のない太陽に向かって歩き出した。

俺の彼女は…

隆史の家で散々弾きまくって大体、ふっきれたような気がする。でも、完全に振り切れたワケではなく、一日中机の上で死んだようになっていた。

それでも、自称おれの恋人と名乗る女子達はお構いなくしゃべりかけてくる。それに俺は無言を返事とした。隆史が見かねて女子達をなだめてくれなかったら俺は多分キレてただろうな。

放課後、一人教室で死んでる俺に如月が声を掛けてきた。

「ようちゃん、何かあったの？」

俺は昨日の事を如月に話した。

「そつか…、ようちゃん。私が代わりだったらダメかな？」

「え…どういう…。」

「その…私が西城さんの代わりになれないかな？」

そう、突然の告白。

「如月の気持ちは前から知ってたよ。でも…。」

「好きなら無くて良いの。ただ、ようちゃんの悲しそうな顔だけは見たくないの。だから…だから…、そばにいさせて…。」

「如月…。」

「お願い…。」

「分かった。如月がそれでいいなら、俺は構わないよ。」

俺は薄々ながらも如月のことが気になってたんだ。そう、西城に振られた時も隆史とセッションした位じゃ、立ち直れなくて。如月の声で立ち直れた。

でも、隆史の気持ちを裏切りたくなって。

「ちよっと、隆史呼んで来てくれないか？二人だけで話があるんだ。」

「分かった。呼んでくるからまっててね。」

如月はそのままそつと教室から出て行つた。静かな学校だから如月が走る足音も響いて聞こえる。

しばらくして教室のドアが空いた。

「なんだ？話つて？」

「如月のことなんだけど。」

「そつか…。告られたのか。」

「すまん。」

「別に構わないよ。予想してた事だし。でも、一つだけ覚えておいてくれ。」

「なんだ？」

「彼女を泣かせるようなことだけはするな。その時は俺はお前を殴りに行く。」

「やつぱお前は凄いよ…。西城に振られたときも俺はなんにも出来なかつたんだからな。」

「俺は…。俺は…。初めて好きになって、これからも変わらない女の涙だけは見たくないんだ。」

下を向いて拳を握りしめる隆史。よほど悔しかったんだろうな。すまん、本当にすまん。

「それにな…。どこぞの知らない男に持って行かれるよりもやつぱり親友の方がいдар。チャンスが無くなつたわけでもないんだしな。」

フ…。やつぱお前は強いよ。俺には無い強さがある。

「ありがとう。」

「お前が礼を言うなんてキモイな。病気か？」

「んだと teme エ！殺されたいのか！！」

結局シリアスな雰囲気はどこかへ消し飛んでしまった。そのまま殴り合いになって、騒ぎを聞きつけた如月と遠坂に止められたけど、お互い満面の笑みだった。

「なんで殴り合つてたの？しかも笑ってるし。」

山口が不思議そうに俺を覗きこむ。

「関係ねえよ。だよな。」

「そうそう、気分…かな？」

「こんなことになるんだったら呼ばなきゃ良かった。」

多少プリプリ如月が怒っていたけど、安心したみたいだ。

ありがとう、如月。ありがとう、隆史。

嵐の前

俺と如月が付き合うことになって数日。彼女は俺の心の支えになってくれていた。

俺の気持ちは西城だけど、西城は俺の気持ちに応えてくれずにいる。正直なところ、この関係は息苦しい。隆史との約束もあり、如月を泣かせるようなことはしまい、と思っているんだけどやっぱり本気で好きにならなくちゃどうしても傷つけてしまうんだな。

そんなある日、またしても西城が校門にいた。

「もう！陽介のバカ！！」

俺の顔を見るなりいきなりそういつてきた。俺は何のことが全く分からずにあたふたするだけ。

「大会の日取りメールしてくれなかったじゃん！！」
ああ……。

「忘れてた。ごめん。」

「信じらんない！！バカ、バカ。バカ！」

「明日香さん、そんなに怒らなくても……。」

「一週間も待つてたんだよ？！怒らずにいられないじゃん！」

「ようちゃん本当？」

「……。」

俺は知らんフリしてあらぬ方向を向く。

「もう！明日香さんごめんね。」

「なんで早紀ちゃんが謝るの？」

「ようちゃんの……彼女……だから……。」

顔を真っ赤にして如月は告げた。

「ええ！！本当？！良かったじゃん。昔っから想ってたんでしょ？」

「うん。」

「にしても陽介は幸せ者だな。」

唐突に後ろから隆史が声を掛けてきた。隣には遠坂。

「うわぁ！エミちゃんじゃん！」

西城大興奮。

「え…、ああ。ファンの方ですか。」

遠坂も慣れた物。軽くあしらう。

「陽介もいいなあ。トップアイドルと同じ学校・同じクラス・同じバンドだもんなあ。」

「小谷君の知り合い？」

遠坂は怪訝そうに聞いてきた。

「西城 明日香。俺の元カノ。」

「え！西城さん？！」

「え？何、何？陽介私のこと話してくれたの？」

何も知らない西城は大喜びしていたが、遠坂の目は憎しみで一杯だった。

「西城、こんなとこじゃ邪魔だから歩きながら話そう。」

「しょーがないなあ。」

まずいことになってきた。隆史と如月は西城の事を理解できてるけど、遠坂は俺との別れ話しか聞いてないからな…。

「ほら、行くぞ。」

俺はあの二人を引きはがすようにして西城を引っ張っていった。

「なによあ。少しぐらい話させてくれたっていいじゃん。」

「遠坂は初対面でなれなれしくされるのが嫌がるんだよ。」

「へえ、トップアイドルなのに変わってるんだね。」

取りあえず、その場を取り繕う。この言い訳だったらしばらく効果を期待できそうだ。

「早紀ちゃん呼んでこなくても良かったの？」

相変わらずの上目使いで少し首をかしげて言う。

「大丈夫だ。分かってくれていると思う。」

「そーなんだ。ラブラブなんだね。羨ましいなあ。」

「相変わらず、アタックされてるんだろ？」

「女子校に逃げ込めばそんなこと無いと思ってたんだけどね、電車

でしか会ったこと無い知らない子がいきなり告白してきたり、おじさん達の目がね。」

「大変なんだな。」

「私より、陽介の方が大変でしょ？私見てるエミちゃんの手、すごかったよ。」

「気付いてたのか？」

「あつたり前じゃん！あの時のこと、話したんだ…。」

「ああ。転校してきて一週間ぐらいでアイツ告ってきたからな。」

「マジで？一目惚れだったんだあ。やるねえ色男！」

西城は肘で俺の脇腹をつついてくる。なんだかくすぐつたい。

「その時に仕方が無く話したんだよ。」

「ふん。あ、じゃあたしコツチだから。」

「お、おお。じゃな。」

「バイバイ、今夜ちゃんとメールしてよ！」

「分かってるって。」

俺は初めて西城とドキドキせずに話することが出来た。如月に感謝しないとな。

その晩俺は忘れずに用件だけ西城にメールした。

k
i
s
s

「ようちゃん！期末前だよ？寝てて大丈夫なの？」

ん？もう、放課後か。

[illegible]

「キヤツ！」

朝から一回も起きずに寝ていた（いつものこと…）俺は期末という言葉に反応せざる終えなかった。

「わりい……。残された日？」

「あと2日だよ。」

2日…無理だ。終わった、留年確定。はい、死亡…。

「そんな人生終わりましたって顔しなくても……。」

「いや、俺の人生はいまここで終わった。」

「私が勉強教えてあげるから。」

「マジ？」

「うん。マジW」

学年1位の才女だ！助かったあぁあ！！神様、ありがとう！！

「それじゃ、今からさっそく……。」

もぞもぞと分厚い鞆から数学を取り出す。フツ…数学なんぞ「俺のターン!!」。

「毎日寝てるから全然知らないよね。んじゃまず…。」

如月、なかなか教え方が上手いな。ふむふむ、よく分かるぞ。

「…それで、ここにこの解を代入すると…」

おー！出来た。スゲエ、って胸当たってるし…。（／／／／／／／／／／）

「ちよ、如月……。胸……」

「あ、ごめん。」

如月ってなかなか……って、オイ俺はこんなキャラじゃないんだからな！！それに如月も顔赤くして下向くな！！

「なんか青春してますねえ。」

ドアにいつの間にか山口がもたれかかっていた。

「いつから見てたんだよ。」

「胸の辺りからかな？」

如月の奴、ますます顔を赤くして下を向く。

「一応、彼氏・彼女の関係なんだからそういうのもアリなんじゃない？」

「お前なあ……。」

「何よ。ずいぶん嬉しそうに鼻の下伸ばしちゃって。」

「う、うるせえよ。で、何だよ？用があつてきたんだろ？」

「あ、そうそう。齊藤君が呼んでたわよ。あのバカ寝てるはずだから起こして部屋まで連れてきてくれって。」

「分かった。」

「行っちゃうの？もう少し青春しても私見なかったことにしてあげるわよ。」

「ほつとけ。」

俺は恥ずかしさと照れくさを隠すように強くあたたった。

「つれないわねえ。なら、早く行きましよう。」

「如月、そういうワケだからちよつと席外すわ。すぐ戻ってくるから、またよろしくな。」

まだ、赤い顔のままコクリと頷いた。

~~~~~

30分後。ようやく隆史から解放された俺は、如月が待っているであろう教室に戻った。

「お待たせ。ってオイ。」

机に覆い被さるようにしてスヤスヤ寝ている如月がいた。ん、幼稚園の頃を思い出すな。確かあの時、如月の奴俺のケーキがおつきいってダダこねて交換してやったのにやっぱり戻してとか言ってウザかったんだよな。それで、ケンカしていつの間にか寝てやがって

拍子抜けしたつけ。

昔っからちつとも変わってないんだな。

「おい、起きろよ。風邪ひくぜ。」

「んゝようちゃんオハヨ。お目覚めのチュー!。」

それは不意打ちだった。いきなり、両手で顔を捕まれてそのまま。如月の唇は柔らかくて、甘い味がした。胸のドキドキが止まらない。

「エへへ。GET、GET!」

無邪気に喜んでいる所を見ると本当に寝ぼけているみたいだ。正直こんな寝ぼけ方されると困るんだけどな。まあ、無かった事にするか。

こんなんでも期末、無事に切り抜けれるのかな?

まだ後ろで二へ二へ笑ってる如月をほっというて沈む夕陽に問いかけてみた。

## k i s s (後書き)

お世話かけました。

なんとか体調はもどったものの、これからバイトです。また遅くなりそうです。



## 夏休み

なんとか無事に期末を終え、全国大会に向けて練習する俺たち。

学校中もとい、マスコミに注目されているのだからそうそう手を抜くことができない。それで、夏休みに突入しても学校に集まって練習しているのだ。

「あ・つ・い。」

「ようちゃん、溶けてる…。」

クーラーをガンガンに掛けているのだが年代物のようで、効果が感じられない。熱い、熱すぎる！！

「ヤバイ。溶ける…。」

冗談ではない。親指が…。汗だ。

「小谷君。タオル。」

遠坂が気を利かせてバスタオルを持ってきてくれた。すでに俺持参のタオルは汗を吸いまくって濡れ雑巾と化している。

「サンキュー。」

俺はゴシゴシと全身の汗をふき取り、ギターへ向かう。

「そんな汗だらけの手で、触らないでよ。弦が錆びちゃうじゃない！！」

練習しようとして、ギターに手を伸ばそうとしたとき山口がギターを退避させた。

「あゝ？」

「弦張り替えるの大変なんだからね！！」

「触らなくちゃ弾けないだろ。ホラ、よこせ。」

ふう。髪から汗がしたたり落ちる。毎年この季節になると体重が10kg減るんだよね。熱い。

「ダメだつて！汗まみれの体で来るな！！」

へっへっへ。壁まで追いつめたぜ。さあゝ小娘、ギターをよこせ。  
「なにやってんだお前は。」

例によって隆史の拳が飛ぶ。どうやら俺が襲っているように錯覚したらしい。

「あゝ？何すんだよ。」

「夏用のギターあるだろ？」

「あゝそういえば……。」

中学の時、隆史の家でも汗まみれになっていた俺に隆史は夏用のギターとかいって、ギターを一本くれた。なにやら特注品らしくて、弦の張り替えが容易にできるらしい。

「俺んちに放置してあるから、わざわざ持ってきてやったんだぜ。」と、青いギターを放り投げる。

「オオ！！久しぶりだな！！」

俺は元気を取り戻し、さっそくアンプにジャックをセットして試しに弾いてみる。

んゝ、相変わらずいい音出すなw

「やるか。如月、歌詞の方は出来たの？」

「うゝん、ちょっと怪しい部分があつて……。曲弾いて貰えない？」早速、セッションに入る。

俺と息ピッタリ。いつものギターなら汗で滑るんだけど、コイツのには特殊加工を施してあつて無理なく弾けることが出来る。

初期の如月の頼みなんてドコ吹く風。気を遣うことなく猛烈に練習した。その間、女性陣は作詞にかかる。

引き続けること3時間。野球部とかの連中の声がいつの間にか聞こえなくなっていた。

「隆史。」

「ん？」

「アイス。」

「ねえよそんなもん。」

「買って来いよ。」

「自分で行けよ。」

「溶ける。」

「……。」

この時の溶けるは汗でアイスが溶けるって言う意味だ。

「しょうがねえな。今回限りだぞ。」

そういつて隆史は部屋を出て行った。俺と隆史は体のつくりが根本的に違うらしく、アイツはどんな環境でも汗一つ流さない。

ま、それが夏の女の子にモテる理由の一つでもあるわけで…。

「買ってきたぞ。」

「はや!!」

実質3分。足って買ってきたらしく息が荒いが、汗一つかいてない。

お・恐ろしい…。

「ほれ。アイス。」

先に歌詞を制作中の女性陣にアイスを渡す。

「」「齊藤君ありがとう」「」

とびっきりの笑顔でお礼を言われている隆史はなんだか嬉しそうだ。

「お前、バニラだろ？」

「良く分かってんな。」

「何年親友してんだよ。」

「今年で4年目だろ？」

「うるせえ。」

こうして俺たちの夏休みが減っていくわけで。

## 全国大会へ

とうとう全国大会前日。正直言ってマスコミやらが取材といってしつこく俺たちを付きまとうのだ。本当にうんざりする。

「小谷君、今の心境はどうか？」

いつかの女リポーターが目を輝かせてインタビューしてくる。だるい、だるい。

「普通です。」

「緊張とかしないんだ。過去に大きな大会とか出たことあるの？」

「無いです。」

「その割には落ち着いてるね。そうだ、今日の意気込みを聞かせてくれるかな？」

うぜえ、うぜええ、うぜええ！！学校という顔がないのなら、カメラをたたき壊してやるのに……。

「何時も通りです。」

「そう、何時も通りの素晴らしい演奏をしてくれるのね！期待してるわよ。」

なにをどう解釈すればそういう風になるんだ？！てか、あんたに期待されてもな……。

「そうそう、遠坂さんの最近の調子はどうかな？」

「さあ？本人に聞いた方が早いんじゃないですか？」

「小谷君から見えてどうか聞きたいんだけど。」

「何時も通りだと思いますよ。」

「元気いっぱいライブでの遠坂さんが見れるワケね。楽しみだね。そろそろ行かないといけないから。またね。」

激しくウザイ女リポーターは穏やかに笑って（鳥肌が立った）カメラさんと去っていった。編集してとんでもない内容にしてくれるんだろう。

ふう～だるい。新幹線に乗るまでどうしてこんな事に付き合わなく

ちやならないんだ？

俺は神を恨みながら到着する新幹線に乗り込んだ。

さて、どうして俺が一人なのかというと……

篠山の野郎が、担任という地位を利用して俺たちを引率すると言いだしたのだ。遠坂と一緒にいたいという下心見え見えの40後半のバーコード頭の言うことはもちろん断固拒否。俺たちの交通費を出す学校側も引率と言うことになれば当然篠山の交通費も支給されるわけで、諸経費を抑えたい経営陣も拒否。しかし、篠山の奴、諦められなかったのか校長に自腹裂いて行くと言うことを言い始めたわけ……。俺はそんな篠山を出来るだけの敬意を込めてロープで縛り上げ、せめてもの慰めに女子更衣室の天井から吊す作業をしていたのだ。それで遅くなったって言うわけ。

幸い俺の座席は窓際で今頃篠山は見つかっててるんだろうか、なんて考えて一人ニヤニヤしていた。

「お！陽介この電車だったんだ。」

なんと上機嫌の西城が！……なんで？？そんな偶然ってアリ？

「って何で陽介だけ？」

俺は先ほどのいきさつを手短に話した。

「なにそれ？キモイ。」

ありがたいことに西城も俺と同じ結論に達してくれたようだ。

「だろ？それで遅れたってワケ。」

「なるほどね。」

「それより、俺の横座つていいのか？」

「誰もいないんだから問題ないんじゃない？」

「そっか、問題ないか。」

「それよりもう、お昼だよ？」

「そういえばそうだな。」

「何も買ってないからイイ。」

「そんなのダメだよ。ほら、私のお弁当あげるから。」

そういつてバックをこそこそしているかと思うと小さな弁当箱が出

てきた。

「西城のぶんなくなるだろ？それに売店あるから行けばいいし。」

「そういつて結局はいかないつもりなんでしょ？」

ギクッ

「そんなワケないだろ。」

「私<sup>が</sup>買いに行くから、その間食べてて！」

なんだか強引だなと思いつつ久しぶりの手料理に舌鼓をうつ。

この卵焼きの…

などと考えていたら西城が戻ってきた。てか、早い…

「はい、足りないと思うからおにぎりも買ってきたよ。」

そういつて3つばかり俺の膝の上に置く。

「料理の腕上げたな。」

「分かる？最近、自分でも成長したなっと思ってたんだ。」

楽しそうに俺の横で話す西城にチクリと胸が痛かった。

## 全国大会へ（後書き）

こんにちは。

ケイです。青春謳華、いろんな意味で終盤に向かっております。

別、小説「君と僕の生きる道」を連載開始しました。12話の短い話ですが、青春の合間に書いた前編シリアスの恋愛物（?）です。良かったらご覧下さい。

まだまだ、バイトが忙しく、書けたり書けなかったりと不安定な日々を過ごしております。

どうか、温かい目で見守ってやってください。

## 自答

巨大なスタジアムの中、既に開会式が終わり一組目が歌い始める。昨日はそのまま西城と一緒に駅で待っててくれたみんなと合流し、ホテルへ直行した。まあ、ホテルだけあって遠坂ぐらいしか練習できなかったんだが…。

「なかなかやるわね。」

「そうか？ 予選と変わらないように思えるが…。」

「あんたのレベルが高すぎるからよ。」

そう軽く山口に一蹴りされた。

出場地区がへボかったんだらう。

「陽介、期待してるよ。」

西城が気を利かせてくれたらしく、軽く俺を慰める。

うお… 如月さんの視線が痛い…。 (涙)

でも… 正直なところ俺は未だに西城が好きだ。こんなところで不本意ではあるが、如月には応えることが出来ない。

甘い、甘い初恋の相手〃西城。

俺の心には彼女しか住んでいない。だけど… そう、彼女は一生俺を… 男を好きにならないと言った。 なにか過去に辛いことがあったんだらうか？

例え何かあったとしても、それでもいいんだ。俺は西城が好きなんだから。悩みとか全部抱えて包み込んでやる。一生片思いでもいい。だけど如月のことを思うと、胸が痛む。俺のことを考え、気を配って来てくれたんだ。幼稚園の頃から何一つ変わってない如月。昔は活発で友達も多かったけど、多分… 俺を、俺だけを見つめるようになったって周りに目が行かなかったんだらう。それで今の状態になったんだ。全部俺のせいじゃねえか。アイツの人生狂わせたのは…。 だけど、俺は… 俺は…

この大会が終わったら、俺の気持ちを彼女にちゃんと話そう。彼女



ならきつと分かってくれる。俺をずっと見守って来てくれたんだから。

『偽善』

ふと、俺のドコかで声がした。

『偽善じゃねえのか？結局はアイツのこと傷つけてよ、泣かすんだろ？』

俺は自答する。

そんなつもりじゃねえ。

『だったらどういっつもりだよ。』

このまま西城を想って、如月に振り向かずに辛い目にあわせるのは可哀想だからだ！！

『可哀想、可哀想って。一番そんな思いしたくないのはお前だろ？だから偽善だっつってんだろ！！いい加減気付よバーカ』

偽善…なら俺はどうすればいいんだ！！どうすればいいんだよ！！！！

「……………つてきてんの？」

隆史に肩を揺さぶられて、思考の渦から引き戻された。

「あ？何だ？」

「何だじゃねえよ。ったく…。そろそろ俺らの番だぜ。」

「え？」

確か俺らは最後の方じゃ…。

「お前ずつと考え事してただろ？ 昼も声掛けても反応しないしさ。妄想？」

「うるせえよ。そんなじゃねえ。」

俺は彼女達のことから、一人のミュージシャンとして切り替えた。

## 自答（後書き）

更新遅くなって申し訳ございません。

挨拶回りと、忙しく立ち回っていました。

ん、アシスタントが欲しい！！と渴望した時期でもありましたw

皆様、これからもご愛読よろしく願います

## GALL

控え室に向かい、最後にリハーサルを行う。

この一回の演奏で全てが決まる。少しのミスも許されない。

「陽介、調子わりーの？キレが全然ねえぞ。」

「あ？いつも通りだぜ。お前の耳が狂ったんじゃないの？」

「だと良いんだかな…。俺はな、この一回に全てを掛けてるんだ。

俺の夢、お前と…今は遠坂も入ってるけど一緒にメジャーデビューしたいんだぜ。」

「知ってる。いつもブチブチいつてるじゃねえか。」

「俺の夢が掛かってるんだ。来年も、再来年もあるけど。俺はこの一瞬に全てを掛けたい。」

「そんなこと、ここにいる奴ら全員だろ？」

俺らの後ろで話を聞いているのを指さした。

「分かってるんだがな。お前のギターに魂が入ってない。なにか雑念でもあるんじゃない？」

さすが、隆史。一瞬で読みとったか。あなどりがたし。

「は？気のせいじゃね？」

「そうか…。」

「ホラ、始まるぜ。」

係員が舞台上スタンバイするように指示してきていた。

「おう。」

俺たちは予選の時よりも遙かに凄まじい熱き戦場に繰り出した。

俺たちが舞台上上がると、さつきとは一変。会場の空気が変わった。さんざんマスコミに煽てられた俺たちだ。その実力がホントの物なのか見極めたいのだろう。

「泉ヶ丘高校の皆さんでオリジナル曲<sup>ガル</sup>GALLです。」

司会が紹介をすまし、俺は隆史に目で合図を送る。

ここは戦場、恋愛感情とかは全て捨てなければならない。俺は…捨てきれぬのだろうか…？

俺がスローバラードでリードする。隆史はそれに合わせ静かにリズムを刻む。

G A L L

夜の新宿ギターを奏でる者一人

孤独を聞き手に歌い続ける

彼は彼女を捜しにやってきた

突然去った彼女を追ってきた

居場所は分からないけど この歌が探してくれる

作詞作曲はや半年

彼は新宿名物ガル

彼の歌声は人を引き寄せ 大きな円陣を作る

時に警察にしょっぱかれ

ヤクザ相手にケンカした

しかし彼女はいない

半年掛けても彼女はいない

遠く離れた異国に行ったのか？

俺に教えてくれよ

ミズキ

ああ夜空の星々よ

お前達は俺に代わって見守り続ける

俺は疲れてきたよ

いい加減居場所を教えてくれ！！

長い長い夜を

ミズキが好きな月に見守られ  
長い長い愛の歌を  
君に届かないと知りながらも 歌う…

いつもの新宿

ガスを囲む人垣

ふとその中に懐かしい笑顔

「ミズキ！」

ギターを投げ出し追いかける

「俺を置いていくな」

「探したんだぞ」

しかし声は届くことなく幻影は去る

悲しい悲しい愛の歌

彼は冷たい姿になって見つかった

悲しい悲しい真実

ガスの想いは届き

毎晩彼女は聞きにきた

星々は二人を見守った

今度はガスが彼女を見守るとき

星の一部になり彼女を見つめ続ける

夜空を見上げればホラ

今日も GAS は輝く

## 反響

悲しい歌詞、それに合わせたようなスローバラード。

今までの会場の雰囲気を一変させた。遠坂の歌声はどのくらい、この会場に届いただろうか？

この歌詞の意味を西城は理解してくれたんだろうか？

俺は刹那の思考の中、会場の反応に驚いた。

拍手がない…

遠坂も不安そうにしている。ミスったか…

と、ちらほら拍手が上がったのを皮切りに万雷の拍手に変わった。さつきまで熱心にカメラを回していた報道陣も拍手をしている。

会場を俺たちが支配できたんだ。そう思うと少し安心する俺がいた。「素晴らしい演奏ありがとうございました。」

司会者が「帰れ」と指示をする。もう少しこの拍手に浸っていたかった。

控え室に向かうと、次の組がやりにくそうにしていた。そう、富竹の名城だ。

「相変わらずの巧さだね。後の人のことも少しは考えてくれないと、困るよ。」

富竹は俺たちに向かって話しかけてきた。

苦笑いで返す俺たち。

「優勝は多分君たちだろうけど、僕らも君たちに負けないような演奏をするよ。」

「期待してるぜ。」

富竹はスポットライトへと向かって移動し始めた。俺たちは元の座席に移動する。

「陽介！すごかったよ。」

西城は甘えたような声で話しかけてきた。

ん、ちあわせw

「エミちゃん、やっぱり歌上手いな。私もそんな風に歌えたらな。」

「そんなことないよ。練習すれば西城さんも歌えるようになるって！！」

「だといいんだけどね。」

ちよっぴり舌をだして微笑む西城。

ヤベエ…たまらねえ。一言…

萌え〜

「…すけ、オイ！」

妄想の渦から俺を引っ張り出すように隆史が俺を呼んだ。

「お？何だ？」

「テレビ曲の奴らが話があるってさ。」

「ハア？興味ないって伝えといて。」

「小谷君、話も聞かずにそれはないんじゃないかな？」

ふと顔をあげるとサングラスをした…俗に言うイケメン？（そこから辺微妙なルックス）の兄ちゃんが声を掛けてきた。

「誰？」

「テレビ局の人。」

「あつそ。」

「……。」

フw秒殺！！

「あ、柳さん<sup>やなぎ</sup>じゃないですか！！」

遠坂がイケメン？兄ちゃんを見て異常に興奮し始めた。



「遠坂、柳って言う人？の知り合い？」

「うん。ゴールデンタイムの音楽番組のプロデューサー。凄腕で通ってるんだよ。」

「へえ。興味ナシ。」

「……。」

「ちょw興味ナシって。最後まで人の話聞こうよ。」

すっかり焦っている柳さん。見ててチョーおもしろいし。

「ん？じゃ、話って何？」

「テレビに出演してみないか？」

「……は？」

遠坂+隆史+俺のハモリ。

「確か君たちEDENってバンドだったよね？EDENで出てみないかい？絶対人気でると思うんだけどな！！」

熱弁を振るう柳さん…。

「俺パス。面倒くさい。」

「んじゃ、おれも。陽介いないと意味ねえし。」

「私は…遠坂エミで出演してるから…。」

「いやいや、エミちゃんと齊藤くん理由は納得できるけど小谷くん、面倒くさいってのは…。一応メジャーデビュー目指してるんじゃないの？」

「俺は趣味。デビューなんて面倒くさそうだからヤダ。」

「えええええ！！じゃ、どうしてこの大会でてるのさ？！」

「……校長の陰謀……」

ハモリ一同、先ほどと同様w

あひゃひゃ。柳さん頭抱えてるよw

## 羨望

「陽介？」

「ん？」

「ちよつといいか？」

「あ？」

隆史は女子が女子だけの世界に浸っている間を狙って俺に声を掛けてきた。そして付いてこいと言わんばかりの仕草。  
なんだ？なんだ？

連れて行かれたのは、会場から少し離れたところにある公園。

「お前：やっぱり西城さんの事が好きなんだろ？」

いきなり本題かい！！（汗、汗

「そ、そりや…なあ…。」

「如月はどうするんだ？」

ああ、そのことか…

「ちゃんと俺の気持ちを話す。」

「そうか…。」

「気持ちがないのに、アイツといたってアイツが辛いだけじゃん。

俺は…幼馴染みとしてアイツの辛そうな姿は見たくない。それに、俺の気持ち気付いてるよ。」

「気付かないフリしてるんだろ？」

「そうだな…。見ててなんか…俺も辛い…。」

「俺な。このままの気持ちで如月と付き合つのは可哀想だと思ってたんだ。」

「ん？」

「もし、お前がそのまま付き合うつて言つのなら俺は…お前を殴り飛ばそうと思ってた。」

「笑えるぜ…。」

「初めに約束したよな。泣かせるようなことが合ったら殴りに行くって。」

「覚えてるぜ。……殴るのか？」

「いや。今はそんなつもりはない。」

「俺はな、本当は如月みたいな奴はお前のような奴と付き合った方がいい気がするんだ。アイツが俺に抱いてる気持ちってのは恋愛とかそんなんじゃないくて、なんて言うのかな……いつも守ってくれる兄貴みたいな感じでしか見てないと思うんだよな。それを好きだって誤解して、辛そうにしてた俺を励まして……こういう形になったんだろうな。」

「……………」

「お前はいつからだ？」

「お前と付き合うようになってしばらくしてからだ。いつも陽介に向かつてはキラキラ瞳を輝かせて笑うのに、他の奴らには何でそういう表情しないんだろうって不思議に思ってた。しばらく見てたんだよ。そしたらさ……なんか……俺に似てるような気がしてさ……如月の笑顔見てたら落ち着くんだよ。それですんげえドキドキして心臓止まるんじゃないかってマジ焦ったよ。」

「長かったな……」

「ああ……。………本当は……本当は……お前が羨ましくって仕方がないんだ……ぜ？」

「なんでだ？」

「あのキラキラした笑顔はお前に向けてしか出さないからだ。」

「そうか……」

「……………」

「思うんだけどさ……」

「ん？」

「お前の想い届いてると思うぞ……」

「慰めんなよ。らしくないぜ……」

隆史は辛そうに下を向いた。

そんな風に俺を…如月を見てたのか…。

辛かったんだろ…。

苦しかったんだろ…。

俺が…ここ数ヶ月感じてきた苦しさをコイツは…コイツは…4年も内に秘めてたんだな。

こんな俺だから口には出さないけど…。

態度にも出せないけど…。

すまなかった…。

## 羨望（後書き）

学校も始まり落ち着いてきたので、3話UPです。

それでも手直しかいろいろあり、3話までしか書けませんでした  
…。

精進していきますのでこれからもご愛読お願いします。

〈募集〉

アシスタント・小説ネタ提供・歌詞及び歌詞のテーマ・扉&挿絵を  
募集しています。

我こそは！！と思う方はメールお願いします。

xxxxholico0523@yahoo.co.jp

まさかの、まさか？！

俺と隆史が会場に戻ったのは夕暮れだった。

まだその後、お互いの事や昔話に花を咲かせて笑い合っていた。

なんだかんだ言っても俺たちは…腐れ縁みたいだからな（照れ笑い

「もうドコに行ってたのよ。捜したんだよ！！」

頬を若干膨らませた西城が俺の胸元を叩きながら言った。

「暇だったから隆史と公園で遊んだ。」

「暇って……！表彰式も全部終わったんだよ！！」

「マジ？！」

「大マジだよ！！二人いなくてエミちゃん一人でステージに上がって恥ずかしそうにしてたんだから！！」

「遠坂、悪かったな。」

「もういいですよ。過ぎたことなんだし。その代わりと言ったらなんですけど……」

語尾が尻すぼみになって最後の方は聞こえなかった。

「なんて？」

「柳さんのテレビに出演することになりました！！！！！！」

「…………マジですか？」

「はい。」

チーン。

終わった…。

「ようちゃんドンマイ」

如月はなんだか嬉しそうに言っている。

「俺は…俺は…いけないからな！！！！」

「ちょっとなんで?!」

「俺はそんな話、承諾しとらん!!」

「でも契約書にサインしてきちゃったし...」

.....

「一ついいか？」

「ハイ。」

「出演日いつ？」

「9月14日です。」

「その日文化祭だよ。アヒヤヒヤ。」

隆史！ナイス！！

顔面蒼白の遠坂、困惑気味の如月、知らないフリしてる西城。

お...おもしれえw

「で、でも...夜ですし...」

「あら？明け方まで大宴会だよ。アヒヤヒヤ。」

隆史の奴...残酷だな。

ま、おもしろいからいいんだけどなw

おもむろにケイタイを取り出した遠坂は、電話し始めた。

「遠坂です、先ほどの件で...ハイ...今予定を確認したら文化祭みたいで...ハイ...ハイ...ですが夜は宴会らしくて...え？本当ですか?!ありがとうございます。...はい、よろしくお願ひします。」

電話を切った遠坂は勝利の笑みを湛えていた。

「今柳さんに連絡したところ特別に、文化祭の野外ライブを撮影して下さることになりました。これで大丈夫です!」

チーン。

今度こそ終わった...。にげれねえ...

ハッ！仮病！そっだ、これだ！！

「あ、病気でも撮影を強行するそつです。」  
読まれた…orz



## 本当の気持ち

大会も無事終わって俺たちは宿泊先のホテルにいる。結構高そうなホテルにしてくれたのは校長の多少の善意だろう。それでもって晩飯どき。

みんな美味そうに喰っている。俺は頃合いを見計らって如月に声をかけた。

「後で、二人で話があるんだけど…」

「ココじゃいえないの？」

「おう、ちよつとな。」

「分かった。」

俺はこれから言うことを考えると、どうしても如月の目を見ることが出来なかった。

これから俺は…如月に惨いことを言わなければならない。お互いのために。

食後、自由行動と言うことになり各々好きな所へ移動し始めた。

俺は如月にそつと目で合図を送り、付いてくるように促す。

「話ってなに？」

誰も来なさそうな非常階段の辺りで立ち止まった俺に如月が尋ねてきた。

「俺の気持ち知ってるよな…」

「私じゃなくて西城さんが好きなんですよ？」

「ああ…。俺たち…お互いのために今の関係を無くした方が良くように思っただけど…」

「私は…私は！ようちゃんのそばにいたい！！」

「でも俺は如月を愛してやれない。気持ちは西城のままなんだ。こ

のままじゃ、俺だって如月が辛い思いをしていくって考えただけでも申し訳ないし……それに、お前を泣かすわけにはいかない。コレが俺が出した最善の答え。……………終わりにしよう。」

如月は大きく目を見開いて声を殺して泣き始めた。

「私……ヒッグ……しつ……しつ……失恋……しちゃった……んだね……ヒッグ。」

「お前の気持ちは……恋愛とは違うと思うんだ。」

「どう……いう……こと……？」

「俺たちの家が近いこともあって昔から色々お互い支え合ってきたじゃん。小学校に上がって、いじめられたのをきっかけにあんまり人と話さなくなっただけ。その……俺だけしか見てなかったから、お前は俺のことを面倒見の良い兄貴かなんかそういう感じの好きであって恋愛感情とかとは違うような気がする。」

「そんな……ことない……よ。」

「だったら、西城の代わりでもいいって言ったのはなんでなんだ？本気で俺を好きなら……西城に嫉妬するはずだろ？でもお前は違った。西城の代わりになりたいって言ったんだ。俺はそれでなんとなくお前の抱いてる気持ちが少し見えたような気がした。それに、俺が西城と仲良く話してたって、お前怒らなかつただろ？普通好きな相手が自分以外の異性と仲良くしてたら嫌だって思うモンだぜ。俺だったら……今でも西城のことが好きだから……他の男と楽しそうに話している姿を見るのは耐えられないよ。」

「そっか……私の……思ってた……気持ちって……ようちゃんの言うとおり……かもしれないね。」

「それじゃ、終わりにしてくれるのか？また、昔みたいに幼馴染みでいてくれるのか？」

「うん。これからよろしくね。」

顔中涙でくしゃくしゃになりながら、最高の笑顔を見せてくれた如月……。

俺は本当に辛い思いをさせたんだな。でも、これから先ずっとこの

思いが続くんだと思ったら、今ココで終わらせたのは良かったのかな？

「すまないな。」

「そんなの気にしないよ。ようちゃんよりももっと、もっと凄い恋、するもん。」

「そうか、期待してるよ。」

「私トイレに行ってくるね。」

如月は俺の返事を待たずに俺のそばから離れていった。

一つ重荷を降ろしたら、更にもっと重い重荷が俺の背中に乗ってきたようだ。

## 本当の気持ち（後書き）

今回は早めに更新できました。

不定期更新なので、いつもチェックしに来てくれる方、本当にすいません…orz

予定的にはだいた中盤？辺りですが、都合により話のペースが上がるかもしれません。とりあえず70話辺りを目指して頑張ります！！

P.S.

まだまだ募集しています。

我こそは！と思う方、是非是非ご連絡下さい

xxxxhollic0523@yahoo.co.jp

## 新学期

新学期そうそう、下駄箱の中には大量のラブレター！。

それもどれも同じように夏の大会で惚れてしまった、っていう内容。ただ、友達に自慢したいが為のラブレターだと判断し、即ゴミ箱へ。

「なんだ、やっぱりお前も貰ったのか。」

後ろを振り向くと隆史。

「だな。お前の方も？」

「ああ。今朝から追っかけがひどい。テレビ局の奴らまで来る。」

「お前はイケメンだからな。」

「お前は不愛想だからな。」

「不愛想で悪かったな。」

「そんなお前でも告られるんだから、世の中分かったモンじゃないな。」

「なに先輩風吹かしてんだよ。」

「だって、こういうの初めてなんだろ？小谷くん。」

「お前だってテレビ局の連中にまで追われるのは初めてだろうが。」

「それはそうなんだけどね。」

「コラコラ、いつまでしゃべってるんだ！！とつくにチャイムは鳴ってるだろ！！ちよっとテレビに映ったからって調子に乗ってるんじゃないぞ！！」

新学期そうそうの篠山…。マジキモイ。

てか、夏の間にハゲが進行したんじゃないのか？ほとんど…。いや前面髪の毛がないぞ！

「さつさとすわらんか！！」

「たたくウルセーな。」

俺はしぶしぶ自分の席に着いた。隣の女子を見ると顔を真っ赤にして俯いている。

「さてさてさて、早速だが文化祭の出し物を決めなくちゃならん。なんか意見あるか？」

そついいながら篠山は黒板に教師とは思えない案を書きやがった。

メイド喫茶

「……………」

教室内のテンションがじょじょに上がっていったのに一気に - 18  
0 の極寒に突き落とされた。

「ん？意見がないならコレで決定にするぞ。」

どうもコイツには羞恥心というものが無いらしい。

とたんに女子が手を挙げる。

なるほど、余程嫌なのか…。

「お前。」

4ヶ月たつのに未だに名前覚えてないのかよ！！

「EDENの皆さんの野外コンサート。」

ふゝんコンサートねえ…。

「ってちよつとまったあああああ！！！」

普段愛想の無い俺が突然叫んだのに驚いたのか、クラス全員（隆史  
& 遠坂& 如月除く）が俺を凝視した。

「部活でやるから、却下。てかギャラもねえのに炎天下の中やりた  
かねえ。それに面倒くさい。」

「お前一個人の意見なんぞ反映されんわ！それに遠坂の美声を聴く  
機会が減るだろう！！」

うは…本音でたよ本音…。遠坂嫌そうな顔してるし…。

「他にないか？」

「ハイ。」

俺

「まだあるのか？」

面倒くさそうにいいやがって（怒

「焼きそば・たこ焼き・ラーメンの屋台・その他食い物屋。」

この辺りが一番妥当だろう。

ん？？？篠山の奴、なに考えてんだ？

「悪くない…、遠坂の接客姿も悪く無いぞ…。」

なにボソボソと危ないこと言ってるんだよ。こいつ本当に教師か？

「お前の意見は保留にしておこう。」

そういつて黒板に飲食店と書いた。

「他に…。」

1時間後、大議論の後クラスの男子は女子に言い寄られて俺たちの  
野外ライブに賛成して…orz  
言わなくても分かるよな（涙

## 文化祭の準備

あゝだこゝだしているうちに文化祭まであと3日。

学校は文化祭ムード一色でいつもより活気づいている。

俺たちは野外ライブから室内に移動した。遠坂が「熱中症になったり、日焼けしたりしたら先生どうやって責任取ってくれるんですか？」と言い寄ったからだ。どうやらこの作戦で中止にしようとしたらしいが、篠山の奴は校長に売り上げの30%を納入することを条件に特別に文化祭開催期間中、体育館を使用できるとんでもない権限を獲得してきた。

もうなんていったらいいのやら…。

あ、ちなみに俺たちのギャラはないからw

「小谷くん!!」

回想にふけっている俺にあの時、野外ライブの案を出した………（名前喪失。）女子が声を荒げてきた。

「な、なんだよ?!」

「練習の方、しなくても良いの!!??」

なぐんだ、そんなことか…。

「全然大丈夫だ。気にする必要なんかないぜ。」

「一体何曲歌うつもりなのよ!!」

「3曲ですが?」

「!!! たった3曲?!?!?」

「必要に応じて作ってるだけだからな。ストックはそんなにないのさ。それに、文化祭のために余計に2曲も作っただぜ。俺は1曲でいいって言ったのに…。」

「1曲聴くだけで入場料500円も取れないわよ!!」

彼女は苦笑混じりに言う。

「3曲だからいいじゃん。」



「もう!！」

怒ってどっか行ってしまった。なんか俺、怒らせることしましたか？

「陽介、なんだ教室にいたのか。」

と、隆史登場。

「やることないからな。」

「体育館にいつてステージ見てこいよ。多分、お前卒倒するぜ。」  
マジ？

俺は隆史に連れられて問題の体育館に…。

うう、寒気がする。扉の隙間から禍々しい気が…。

ガラガラ

俺の目の前に広がった光景は…。

ステージのバックに垂れ幕がかかっている。垂れ幕自体は良しとしよう。でもなんで露骨にハートマークがついて。”LOVE 陽介

”って書いてあるの？

てか、俺のアコギ（アコースティック・ギター）に妙なフリフリが付いているし。しかもマイクには特大のリボン…。

まさしく、女の子バンドが好きそうな設定になっておりますな…。

「陽介、生きてるか？」

「今、生死の境を彷徨ってたところだ。」

「どうする？」

「全部外す。」

俺はドシドシと舞台上がり、盛大に飾られた俺の聖なるアコギを救出。

次はあのふざけた垂れ幕の切除に…向かおうとしたら、女子の猛抗議にあった。

「ちよっと小谷くん!!!なにしてるのよ!!!」

「こんな恥ずかしい舞台で、できるかよ!!」

「可愛いじゃない! 恥ずかしくなんかない!!」

「可愛くもないんだ! 俺はこんなのは嫌だああああ!!」

俺の必死の抵抗が功を奏したのか、後日男子陣が考案した垂れ幕に変更され、そのたフアンシーなフリフリも切除された。

女子のパワー恐るべし…。

## 文化祭前日

今日は文化祭前日。

クラス一同ビラ撒きに励んでおります。

特にメインとなる俺らは5人揃って駅前で笑顔振りまきながら、ビラ撒いてます。

どうやら、若い子は俺たちのことを知っているようで、しきりに握手を求めてきたり写真撮影を強行してきたりした。

特に遠坂の知名度は凄まじく…（といってもやはりトップアイドル）男達に絡まれることがしばしば…。その度に俺と隆史が救出を試みる状況がループの様に続いております。

と、目の前に止まるのは一台の車。もしやと思い警戒していると…やっぱりテレビ局の連中。

あのうざったいリポーターの姉ちゃんがコッチに向かってくる。

「今噂の、泉ヶ丘高校軽音楽部、E D E Nの皆さんです。」

撮影許可してないのに堂々と取材を始めるリポーター。

「こんにちは。今、なにをしているんですか？」

テレビ局の連中が来ているので何事かと人垣が更に膨れる。

「明日学校の文化祭なので宣伝にビラ撒きしてたんですよ。」

むすつとして答えない俺の代わりに隆史が愛想良く答える。

「文化祭と言えばゴールデンの某音楽番組が取材に来られるそうですね。」

「ええ、全国大会でオファーが来たんですよ。」

「緊張したり不安になったりしませんか？」

「国ではあんまり緊張しませんでした。が、撮影当日は緊張すると思いますよ。」

「メジャーデビューするって言う話もあるようですが。」

「その辺の話は俺たちまだ高校生なので決めかねています。」

「将来はやはりこのメンバーでミュージシャンになれるんですか？」

「僕個人としてはこのメンバーで歌って行けたらいいと思っています。」

「貴重なお時間ありがとうございました。宣伝の方、頑張ってくださいね。以上、現地の藤原でした。」

そうか、この姉ちゃん藤原って言うのか…。あとで柳にチクってなんとかして貰おう。

強制的に行った撮影が終わっても礼一つ言うことなく帰っていった。まったく、失礼な奴らだぜ。

とたんに人垣が俺たちの持っているビラを奪い始めた。どうやら、こいつら来る気まんまんらしい。少しでもテレビに映りたいっていう野次馬根性全開だ。

ダンボール箱1箱あったビラは瞬間に無くなった。これを良いことに学校に帰還。

しかし、校門の前では野次馬達がウロウロしていたし、別のテレビ局の連中もいた。

ここは…こういう非常事態は…。

無断で帰宅するに限る。

## 文化祭当日

ついに来てしまった魔の文化祭。

朝早くから校門の前で列を作って開門を待ちわびている野次馬が凄  
い！

朝登校する時なんて、野次馬から歓声が上がったほどだ。

んで俺らとはというと、開会式にも参加させて貰えず、体育館の控え  
室で待機させられている。

「遠坂、あんまり張り切って歌うなよ。持久戦になるからな。」

「うん、私のことよりもふたりは大丈夫なの？ 疲れるでしょ？」

「その辺りはなんとかするさ。」

正直、疲れは目に見えている。最初から少しばかりの手抜きでやっ  
ていかないと、午後は倒れてしまう。

「準備はイイ？」

どうやらこの男子は学級委員と言うことで俺らの世話役になってし  
まったらしい…。ドンマイ

「東くん、ありがとう。」

ほう、この男名を東と申すか…。今日だけは覚えておいてやろう。

「そろそろ一回目始まるよ。舞台上がって。」

暗い舞台を観客に気付かれないように上がっていく。

「お待たせ致しました。E D E Nの皆さんです。」

盛大な拍手と共に、スポットライトが俺らを照らす。あちこちから  
歓声が上がる。早くも観客達はテンションを上げ始めたようだ。

「皆さん、おはようございます。」

遠坂が営業スマイルで挨拶する。

「私たちはまだ結成したばかりなので、オリジナル曲のレパートリ  
ーがあまりありません。来て頂いた皆様には3曲だけ、最高の歌を

プレゼントしたいと思います。初めに”片思い”聴いて下さい。  
遠坂は振り返って俺たちに合図を送る。  
俺は静まり返った会場の静寂を静かに破る。

片思い

片思いしている自分がいた  
相手も薄々気付いているみたい  
素っ気ないアナタの日常の仕草  
恋する乙女はそれだけでも胸がキュンとする。  
告白なんて怖くて出来ないよ  
返ってくる返事が怖くて  
なかなか言い出せない。  
この想い アナタに伝えられたなら  
どれだけ胸がスッキリするだろう？

永遠に続くと思ってた  
終わらないと 変わらないと、思ってた  
だけど些細な一言でアナタは変わってしまったね  
でも私の心にいるのは  
ずっと、ずっとアナタだけだから

アナタの失恋を聞いて  
私は悲しくなった  
振り返ってくれないのは  
もちろん悲しいけど  
何より曇り空みたいなアナタを見ていられない  
顔を上げて  
いつもみたいに明るく笑ってよ

私はアナタが立ち直る事を祈り  
毎晩涙する

神様は残酷だね

叶わない恋なんてさせないでよ

耐えられないよ

苦しいよ 悲しいよ

でも…ちよっぴり幸せ

繰り返す

いつかアナタが振り向いてくれると信じているから  
私は今日も私の太陽を見つめ続ける

歌い終わると会場から大きな拍手が上がった。

## ライブ状況

「この歌は、私が初恋したときのことを書いたものです。相手の人は別に好きな人がいて、その人しか見ていなくて、私がなんどもアタックしてみたのになかなか気付いてくれなかったんです。でも、決心して告白すると案の定断られてしまいました。でも、どうしても彼を諦めることが出来なくて、彼のそばで彼を見つめ続けることにしたんです。次の曲は失恋したときに作家志望の友達が私の為に書いてくれた詩を歌にしました。」

遠坂は未だに俺のことが好きなんだな。俺は、罪な男だよ。こんなにも周りから愛されているのに、俺を愛してくれない人に想いを寄せているなんて。

でも、そんな女々しい俺でも遠坂はずっと見ていてくれてるんだな。ありがとう。遠坂

今の全感情を俺は奏でること以外、表現する方法を持たない。響け俺の思い！

## 哀詩

辛いときは存分に泣いて

楽しいときは大声で笑えばいい

この世界には希望が満ちている

辛いとき、悲しいとき 人生色々あるだろう

失恋・入院・他界、色々あるだろう

でも前を向いて！

明日は必ず来るんだ

たとえ君が人類最後の一人でも



その日、その時を大事にして欲しい

辛いことがあって友達に相談して

相手の子は親身になって聞いてくれている

でも… 結局は

「早く忘れちゃいなよ」

一言で終わらせてしまう。

そんな簡単に済まさないで欲しい

私の悲しみは忘れられない

永遠にこの胸に刻まれているだろう

幸福は身近にある

君はそれに気付いていないだけで

不幸だと思いこんでいる

少し顔を上げて冷静に

周りを見てごらん

一番気付きやすいのは愛する人といるとき

それでも分からないなら…

きっと君は幸せの絶頂にいるんだろう

たった一度きりの人生

貧乏でもいい

愛する人と一緒になり

幸せになろう

「この詩を読んだとき、泣いてしまいました。でも、気付いたんです。私の幸せは彼の笑っている顔なんだって。いつまでもしつこいと思っている方、おられるでしょう。私もそう思います。でも、この気持ちだけは忘れたくない。そう私は考えてるんです。次は、私

ではなくて今まで演奏してきてくれた二人に、全国大会で優勝できた曲、GALLを歌って貰おうと思います。」

GALL、この曲は実は俺と隆史で俺たちのために考案した曲。全国大会で遠坂に歌わせたのは少し、可哀想だと思ったけどこれじゃないと優勝できないと思ったんだ。

俺は、隆史とこの歌を歌い短いライブを締めようと思う。

## ライヴ状況（後書き）

更新遅れました。

先日、空き巣にあい、PCが盗難：

只今ネットカフェにて投稿しております。学生の身、高頻度でネットカフェに通うことはかなりの経済的負担になります。みなさまにはいち早く、小説を読んで頂きたいのですがこればかりは仕方ありません。

ですので、しばらくの間「休載」という形を取らせて頂きたいと思っております。（時期を見て、ネットカフェから投稿致しますので、ご安心下さい）

皆様のご理解と応援よろしく申し上げます。

盗撮ですか？！

無事、一回目のライブを終了させた。あのあとアンコールの嵐が凄かったけど、俺たちはそれに応えようとは思わなかった。

控え室に戻ると、いつの間にか柳が来ていた。

「さっきのライブ良かったよ。高校生とは思えない、プロ顔負けの良さだったよ。」

「ってなんでいるんだよ？関係者以外立ち入り禁止だぞ。さっさと出てけ。」

俺は邪魔者の排除に悪戦苦闘していた。

「そう、邪険にならないでくれよ。さっきのライブ、バッチリ撮影させてもらったよ。今夜はコレを流して視聴率獲得だね。」

ん…？

「撮影したのか？本人達の承諾なしに！！」

俺は怒りのオーラを体に纏い、戦闘態勢に入る。

「カリカリしないですよ。文化祭の時に取りに来るっていったじゃん。」

「

「撮影料をよこせ。100万だ。」

「撮影料なら既に受付の人に渡してあるよ。」

…マジですか？

「そんな怖い顔して硬直しないでwそうそう、もう一つ用事があった来たんだ。君たちCD出してみないかい？」

「興味ナシ。やる気ナシ。面倒くさいので俺はパス。他の人雇って演奏して貰って下さい。」

もちろん俺は即答。

「俺は陽介とじゃないと組む気がしない。」

「私は…二人じゃないと何時も通りの声が出せない…。」

よってEDENメンバー全員一致で却下。

「だと思ったよ。でも僕は諦めないからね。絶対に君たちにはメジ

ヤーデビューしてもらおうから。」

ほう…俺たちに挑戦状を叩き付けたな。うひひひ。見ておれよ、痛い目に遭わさせてやるからな。

「なんどいわれようと俺にはその気はねえよ。」

これ以上、柳にうだうだ言われるのがイヤだったので、柳を外に放りだした。

その後、ライブのほうは超満員（立ち見客も数多くいた）でかなり儲けさせて貰った。他の組の連中も急遽、体育館付近に店舗を増設してライブ待ちの客の腹を満たしていた。

どうやら、今回は俺たちを中心に文化祭が回っているようだ。

さて、問題の部活ライブ。これは基本野外に設置されたステージで各バンドが1曲だけ歌うというもの。なにが問題かというと、野外＝無料なので客足は最高になると予想される。故に！学校が超満員になると言う恐ろしい現象が発生してしまうのだ！！

俺たちが歌う予定なのは今日の日にとっておいた、俺の隠し玉。

隆史と一緒に作った、思い出深い曲だ。

盗撮ですか?! (後書き)

取りあえず一話更新。

歌詞、まだ考えてなかったなので次回に回しますorz

## 超絶ライヴ（前書き）

今回は長め？です。

今話で登場する漢字、蒼穹は「そうきゆう」と読みます。意味は天空。辞書で調べるとより詳しく載っていると思います。

## 超絶ライブ

ついに来てしまった、この瞬間。

俺たちは今、野外設営の臨時リハーサル室にいる。ここまで、到着する間、多数のファン（？）にサインを求められ、手を握られ、押し合いへし合いetc…。

そりゃ、戦争みたいなもんでしたよ。

「凄い人数だな。この学校始まって以来の事らしいぞ。」

隆史はどこから仕入れてきたネタなのか、自慢げに話していた。

「ほとんどが、俺ら目当てなんだろうな。」

俺はボソツツと独り言程度に言ってみた：「んだが

「その通り！さっき、ライブの様子を局に送っただけで、好評だったよ。」

どこからともなく自称：俺たちのマネージャーという称号を掲げる柳がやって来た。正直ものすごくくウザイ。

「帰れ。」

「そうそうそんなこと言われると少し凹むな。でも、僕は君たちを絶対に離さないからね！！」

「あんだ、プロデューサーじゃなかったのか？俺たちのマネージャーとか言って歩き回ってるらしいけど。」

「局の社長がね、こんな逸材をキープしておかないで他に取られるのはもったいない！それに多額の出演料が無駄になる。経費削減だ！！」  
「っっておっしゃってね。それで僕が君たちのマネージャーになったってわけだよ。」

「ならんでいいわ！！」

俺は思わず突っ込んでしまった。

「そう照れなくてもイイよ。」

「だがな、俺たちは柳さんと契約を結んでないから、他の音楽会社にもでも契約することができんだぜ？」



「もちろん分かってるよ。だからこうして他の虫が寄りつかないように僕がガードしてるんじゃないか!!」

そんな胸を張って言う事じゃ、ないだろ…。第一そのテンションがウザイ。

「俺たちは俺たちの意志で動く。柳さんに束縛される義理はない。」

「僕もそんなつもり無いよ。コソコソと後を追って勝手にPVとか作っておくから。」

こいつ…、全然話が分かってないようだな…（殺!!）

と、俺が怒りに燃えていると遠坂が袖をひっぱってきた。

「そろそろ始まるよ。」

「分かった。」

さてと、戦場に赴きますか。

ステージに上がると目の前には壮大な草原…もとい人の群れ（？）が校庭一面に広がっていた。校舎の窓と言う窓からは頭が覗き、そりやもう学校の文化祭とは思えないほどの人、人、人。

先によつてた先輩方はこんな状況の中で良く出来たと、少しばかり感心した。

さあて、いきますか。

「こんにちは。」

唐突に遠坂がマイクを通して挨拶した。

俺は速攻終わらせようとしていたのに、なんだか出鼻をくじかれた気分だ。

「今日は、お集まり頂きありがとうございます。体育館でのライブを聞いてくれた方にも楽しんで頂けるよう、別の曲を歌いたいと思います。この曲は、この二人がバンドを結成したときに作った曲で…。」

トップアイドルらしく、客の接待には慣れている模様。

でも、今回の曲というより…。所詮中学生が作った駄作なんだ

し o r z

さて、遠坂の挨拶も終わったことだし、始めるか。  
はじめは俺のギターの前奏から……。大空に響くように、優しく、丁寧に。

蒼穹

俺たちが出会った思い出の記念樹  
お互いに求め合い支え合うバンド  
不完全な二人ながらも 最高のメロディーを奏でよう  
響け！！俺たちの心の音楽 永久とわに共に

大空を舞う鳥たちよ 何を見て、何を感じてるんだ？  
地を這うケモノたちは 大空を見上げて問う

” 空には何があるんだ？ ”

イカロスは空に憧れ飛び立った  
偽りの蠟の翼を携えて

彼は地に落ちはしたものの 何を見たんだ？  
汚れ無き蒼穹を飛ばう！！

自ら翼を広げ さあ

我々は何を目的に存在するのだろうか？  
何をこの世界に満たせばいいのだろうか？  
我々を見守り続ける 蒼穹  
お前は何を求める？

悲しみの縁、喜びの詩  
人間達は空を見つめ 感傷に浸る  
空を飛ぶ人工の器うつわ  
汚れ無き蒼穹を汚し 傷つける

我々は何を目的に存在するのだろうか？

## 超絶ライブ（後書き）

急ごしらえの歌詞で申し訳ございません。

一応、元ネタを考えてきたものの、今ひとつの出来。当方が執筆行程で変更したせいです。

今回は一話更新となりました。次はもっと具体的に下書きをして数話更新できるように勤めて参ります。

## ファン多数

一組一曲がこの学校の野外ライブの鉄則である。俺たちは名残惜しそうな観衆を完全無視して、ステージから降りた。

「うん、やっぱり君たちの曲は素晴らしいね。遠坂さんじゃないと二人の伴奏について行けなさそうだし…。本格的にウチでデビューしてくれる火が待ち遠しいよ。」

関係者以外立ち入り禁止の張り紙を無視した蛮行。柳は何喰わぬ顔で控え室に入ってくる。

「デビューするきなんてねえっていつてんだろ。こりねえ人だな、あんたは。」

俺は多少の皮肉を込めて言ってやった。

「そりゃあ、そうだよ。こんな逸材を手放すようなバカじゃないからね。本人達の意見なんて世論の前では風の前に塵と同じ。」

「俺たちは陽介について行くだけだからな。本気でデビューさせたかったら、陽介を懐柔するんだな。……まず無理だろうけど。」

「先輩達が使いたがっているみたいだよ。でようよ。」

こんな所に長居しても仕方がないので、遠坂の言う通り控え室を出ることにした。

「サインください。」

「私EDENの大ファンなんです。」

おっかけとはまさしくこのことだろうか？控え室の前には小規模ながらも、女性陣が待機しており俺たちに執拗にサインを迫ってくる隆史なんか”好き”って抱きつかれてるし。

「これが世論だよ。君たちが単独でこの場を抜けるのは厳しいだろうね。まあ、デビューさえしてくれたら僕たちが守ってあげるけど。」

これは一種の脅迫である。しかし、俺はこんな卑怯な手でデビュー

しようというほどバカではない。ふ、柳後で楽しもうか・・・w  
強気になってみたものの、この人数と圧力（物理的な）には勝つことができない。何とかして彼女達にお帰り頂かなければ・・・。ってか、まだ体育館でのライヴの仕事あるし・・・。そうか、クラスの奴を上手く使って。

「隆史、委員長に電話して救出してくれるように頼んでみる。」

「その手があつたな。」

隆史は女性達に服や髪、いろいろな所を捕まれながら電話して助けを求めた。

数分後、なぜか「SP」の腕章を着けて救出に来てくれた。それはそれはプロと見まごうばかりの腕前。正直、関心してしまった。  
「午後からのライヴが押してます、早く控え室に入ってメシ喰って準備して下さい。」

なぜに敬語？お前、もしかしてマジでこの仕事やってねえ？

「わかった。」

遠坂が満面の笑みで返すとそいつはほんのり頬を紅く染めた。  
ふゝむ、遠坂の人気は絶大だな。

控え室に戻ると、そこにはなぜか西城がいた。

「陽介！ライヴ良かったよ。」

「そ、そうか。」

顔が紅くなっているのを自覚しつつ、観られないように伏せる。

「相変わらず遠坂さんの声ってすごいねえ」。私絶対あんな声でないよ。」

のほほんと笑っているその笑顔は罪です。これ以上私のチキンなハートを刺激しないで下さい。

「陽介、なに上がってるんだよ。」

苦笑混じりに隆史は耳うちする。

「うつせーよ、ちょっとビックリしただけだ。」

「またまた、無理しちゃってえ。嬉しいんだろ？コノヤロー。」  
「うるせえー。」

「なあに、ヒソヒソやってんのよあんたら。ギターのチューニングしたから弾いてみて。」

山口があきれ顔でギターを放り投げる。

うん、流石だな。いい音を出している。

「問題無いみたいだね。午後からちょっと回ってくるから、無茶な弾き方するんじゃないよ。」

俺の弾き方はギターに負担を掛けるらしい。思いっきり釘を刺された。

ま、こういうのだったらデビューのイイかな？って思ったりしてる。

## ファン多数（後書き）

本文が短い上に、更新遅れて申し訳ございません。

他の作品に浮気していたのもあって、ぜんぜんイメージが浮かばず、このような結果になってしまいました。

毎日顔を出して下さった皆様に深くお詫び申し上げます。

なお、またしばらくの間、新連載を予定しております小説の下書きをしなければなりませんので更新できません。下書き終了後こちらにも執筆させて頂きます。

ひきつづきご愛読よろしくお願い致します。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1465d/>

---

青春謳華

2010年10月12日06時25分発行